

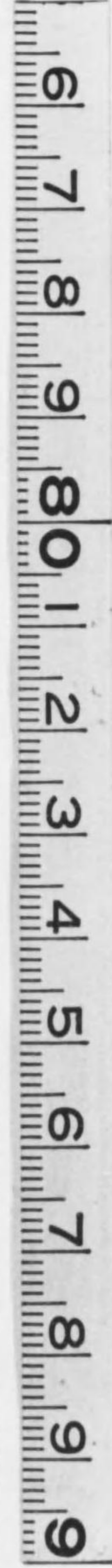
F13-Mu71-6ウ



1200500762839

13
71
6

在
野



始



F13

Mu71-6



室生犀星著

世界

東京出版



目次
ゆめは枯野を
山 驛
近 江 路
作 家
馬
白 髮 大 夫
世 界
後 記

一 壘
二七
一七
一九
二四
二六
三五

ゆめは枯野を

垣隣の野田さんの屋敷は一段と高い地盤にあつて、大谷石をつんだ嚴めしい境界をききつてあつた。その大谷石の上にさらに板の三尺塀を作り、角谷さんの方から見上げるやうになつてゐた。ちやうど、その境界に相當年輪を食つた櫻の木があつたが、春は何時でも少しはやめに蕾を膨らまし、角谷さんの櫻もそろそろ氣配はじめたといふふうに、垣根の角から往來の方へ、南向きの枝は野田さんの庭の方に擴がつてゐた。だが、青葉どきになると、夥しい毛蟲が巢をつくり、巢ばなれのするころは、野田さんの芝生のうへに絲を引いて下りて來た。そして柔らかい芝の葉は處どころ蝕はれて、醜い禿を作つた。太つた毛蟲が互つてゆく芝生は折れて、掃いても、掃ききれぬものではなかつた。もと軍人だつた野田さんは箒の先で毛蟲を掃き飛ばしながら、角谷さんの櫻をあふいでいつた。

「毛蟲まで意地わるに出来てゐる。」

野田さんは芝生の上から、毛蟲をはきよせそれを箒のさきで圓めると、角谷さんの庭の中に入りおとした。大谷石と垣根の間に、一尺くらゐの隙間があり、そこから野田さんはさらに圓められないばらの毛蟲はことごとく角谷さんの庭の方に掃きおろした。毛蟲だけならまだいいが、竹箒のさきに引つかゝつて裂けた青芝のごみまでが、角谷さんの庭に落ちて行つた。ちやうど角谷さんの庭は大谷石のさきまで蔬菜の畑がつくられ、小松菜の葉のおもては泥とごみをかぶつてよごれた。そこから角谷さんの茶の間の縁側があり、縁側に片手をささへた角谷のおくさんが、先刻から毎朝のやうに野田さんの箒の音を聞きすまし、及び腰になつて大谷石と垣根の間に、舌のやうに覗く竹箒の先をくやしきうに、凝と見すゑてゐた。かすかではあるが、反りを打つた小松菜の葉のおもてにこぼれる、乾いた泥とごみの音は、聞き澄してゐるとかなり大きい音響であつた。しかも、しきりなしに落ちるごみの埃は、茶の間の前までひろがつて來た。

「何の怨があんな真似をするんだ。しかも毎朝ぢやないか。」

これも、もと海軍の軍人だつた角谷さんが縁側から例の箒の先を眼に入れていつた。おなじ軍人でも、海と陸では、ことに垣隣に住み合つて家を建てた當時から、いがみ合ひをつづけてゐた。

「見ていらつしやい、毛蟲はみな野田さんの庭に追ひかへして遣るから。」

彼女は袖垣の下に立てかけてある、二本の竿を見ながらいつた。

「下水だつてみな家の前に流しこんでゐながら、一度も掃除をしたことがない。角谷のおくさんは、この下水のことで、口の酸ばくなるほど、老夫と諍つて交渉するやうにかねがねいつてゐた。」

「だから野田さんに掃除させるやうにいつてゐたぢやございませんか。」

「そんなことで改まつて表門から行つて交渉できるものではないさ。」

「氣の永いのも、もう三年越しがまんしてゐるぢやないんですか。」

「だが機會がないんだ。」

「氣の小さいことを仰有つてゐるから馬鹿にされてゐるんです。軍人なら軍人らしくきつぱりといった方が立派ですわ。」

口先ばかりでえらさうにいふが、いざとなると、勝手の悪い事はみなわたしに廻して置いて、顔をあはせば、お世辭めかしてお早うございますで、すぐ負けてしまふくせに、そんなのなら黙つて掃き溜めにされても、後始末をしてゐた方がいいとおくさんは、老主人を手痛く遣り込めた。そこまで追ひつめられると、角谷さんはあとは口のうちをもがつかせるだけで、完全に負けて終つてゐた。終戦後、勤めるところのない彼は七十になつても、家の手重い仕事は遣り抜け、洗濯や畑仕事をしてゐたが、極端な食糧の切り詰めで異常な健康であつたにも拘らず、息切れを縁側で調節してゐる角谷さんは、全く氣の毒だと附近の噂にまでのぼつてゐた。たとへば、角谷さんは家の前の雑草取りや溝掃除をおくさんから言ひ付けられると、一遍、往來に出て前方と後方に通行人がゐるかゝるかを、たしかめてから、非常な氣忙しい速度で溝掃除の箒をとるのであつた。そしてその間ちゆう、前と後ろに知り合

ひの通行人がゐるかゝるかを見さだめ、一人でも遠くに通行人のかけを見ると、角谷さんは裏門に逃げこんで、その板塀から通行人がとほりすぎるのを、板のすき間から見てから又もとの溝掃除にとりかかつた。不幸にも、また、別の通行人のかけを見ると、ふたたび元の裏門にもぐり込んで、子供のやうに人のとほり過ぎるのを待つてゐた。しかも、それらの所作は家では、なるべくおくさんにそんな姿を見せたくないの、二重の氣配りがいりやうであつた。もち入れといふ筒袖を著た角谷さんは、泥のついた手のままでときには裏門をばたんとひらいて、また、ばたんと音を立てて閉めなければならなかつた。

角谷さんの裏門の板戸はすこし風が立つと、ひとりでに開いて、風がもとにもどると、また、ひとりでにしまつてゐた。そのたびに蝶番のゆるんだあまい板戸は、頭したたかに柱に叩きつけられて、非常なといつてもいいくらゐの大きい乾いた、頭が馬鹿になるやうな音響を立てた。晝間は寢て晩は仕事に出掛ける一軒先の吉川さんは、そのたびに氣持をくさらせて、わざわざ目立たぬやうに走つて出て、角谷さ

んの木戸が二度とがたんがたん音のしないやうに閉めてゐた。弛んださるはいくら
箆めても、風が立つとから戻りしてすぐ木戸はばらつと開いて、ふたたび風に跳つ
て飛び上るやうな音を立てた。

「家の中にあるあの音が聞えんのか。」

吉川さんは漆器類の半端物の、^{おつもの} 椀の蓋にみがきをかけ、それが一枚づつ古漆の
光澤をかがやかせてゐるのを、單獨の什器のやうに新聞紙につつまこんでゐた。能
登の輪島が本場物でも、取り分けすぐれてゐる漆器類を仕込んで来た吉川さんは、
それを市場に持ち出して捌いてゐるのだが、品物の良質はたとへ半端物でも面白い
ほどの賣行であつた。輪島では蓋ばかりあつても賣り物にならない。しかも、五客
とか十人前とかの揃ひの品ならともかく、一枚二枚といふほんたうのがらくたに過
ぎない、五年前なら、誰も手に取る者さへゐないしろ物でも、このごろの什器に事
缺いた時世では、單獨の一枚づつなら、一人前の菓子器にも、皿のかはりにも、さ
らに浅い物は茶托の役もつとめられてゐた。

能登の輪島まで行つても、半端物はそんなに永續するものではないので、今度
はお茶椀の蓋や小皿の二三枚物の半ばも買ひ込んで、漆器は上値にし、瀬戸物も
當にさばく豫定で吉川さんは焼けた都會のまはりにある、小さい町々に買出しにあ
つた。それも、田舎は田舎で瀬戸物が拂底であるため再び漆器類をあさつたが、
どういふものか、漆器の半端物だけはどうかやら乏しいが、手に入れることが出来た
のであつた。漆器をつかふことが何となく昔から揃物の習慣があつて半端物はつか
はないらしかつた。

「こんな頬白なぞどこが可愛いんだか、まるで分らない、鳥どもさへゐなきや、
もつと此方にまはる食べものがある筈だが。」

吉川さんは籠のそばによれば、きつと、とさかを逆立ちさせて小憎らしく怒る頬
白や、蟻のやうな白ぼいせきせいんこ、それから何の役にも立たない一羽きりの
鶏までが、吉川さんの顔さへみれば鶏のくせにさからつて、すぐ啄つき寄つて危な
くて近よれなかつた。妻君のきぬ代さんにはせると小鳥や鶏を目の敵になさるあ

なたを、ちやんと鳥の方でも知つてゐるのだといつた。すり餌や鶏の餌はわたくしの配給量を減らして、それだけの糠やふすまを鳥屋で都合して貰つてゐるんだから、夜の賣上げからは一錢も使つてゐない。野田さんからの縫物のあがりも家につかふ外に鳥の餌に廻したつて、それこそあなたから苦情をいはれる筋合のものでないと、反對に吉川さんは手強く遣りこめられてゐて、次には何もいふことが出来なかつた。縫物にしても、市場では蕙の上にまで持つて行つてしてゐるのだと、妻君はいひ、吉川さんは一言もいへなかつた。

「たまに生む卵の一つくらゐは食はしてくれてもいいぢやないか。」

吉川さんは金では卵一つすら見付けられないのに、家でありありと生んだのを見ただかゝやかしい卵も、きぬ代さんは何處に入れてしまふのか、まるで見たことがなかつた。留守の間に、心當りをさがして見ても、卵は生むと、すぐ魔物のやうにかげをひそめた。

「鶏の卵は自分の食べ物をかせぐ鶏のかせぎなんだから、あなたなぞには一つも

あげられない、しよつちゆう邪魔物扱ひにされてゐて、卵まで食べられた日にや間尺にあひはしない。」

「それぢや一體なんのために鶏を飼つて置くんだ。」

きぬ代さんはわけもなくいつた。

「可愛いからぢやないの。」

「ふん、ちや、おれは可愛くないのか。」

吉川さんはい失言して自分の言つたことで笑ひ出した。

「何言つてゐるの、そんなことを言はれるとぞつとして鳥肌になるわよ。」

きぬ代は心からいやさうに、顔をぞつとさせて見せた。吉川さんは殴ぐられたより、もつと酷い本物を覗き見たやうで、この女はただ生きてゆく相手に自分をえらんでゐるに過ぎない、女らしいものはみんな何處かに打抛つて来て、女の滓のやうなものしか持つてゐないのだと、どちらを向いても自分の篋まりこむ餘裕のないことが、いつもだが、けふはその正體を見とどけたやうな氣がした。

「ぢや、何もおれと一緒にくらす必要もないね。」

「必要不必要の問題ぢやないわ、かせぎとほしに稼いで貰はなくちや。」

「それだけかい。」

「それより外になにもないわ。」

面白いことや可笑しいことや、おいしい物なども、吉川さんにはなかつたが、きぬ代さんにもあらう筈がなかつた。やみの市場で振り當てられた一蕙の地域は、人の溜りの悪いはづれだつた。冷えも飢ゑも、古英蔭一枚の下には、きのふ一昨日の自分の坐り場所と、きぬ代のそれとが永い間に土地に乾きが生じて、晝間でも、膝を折つたところのあとが地面の上を固めて見られた。

「ひどいもんだね、あいろんの代りになる。」

吉川さんも腹痛の續く日には、いつも、その地面の坐りどころが眼にうかんだ。リュックに背負つた荷物と、英蔭を一枚かかへ、左の手にかんてらを提げた吉川さんには三十分の街道は、登りの九十九谷もあつて骨だつた。それも夜の仕舞からま

た三十分をくたくたに歩いて戻つても、お腹に入れるものなぞ、一片も用意してなかつた。きぬ代さんも三日に一度は一緒に行つても、中には二日休まねばミシン仕事が出来なかつた。肩とか腰とかは覺えのないほど凝り、吉川さんは柱の角で背骨の兩側を上下にこきながら、やつと息がつけるくらゐであつた。暇さへあれば睡りかけてゐるが、生眠りはそれ自體折り重つて深まつても、睡りのそこをつくほど睡れない、眼ばかりしばしばして、見るものが判然と眼にとらへられなかつた。そこに持つて來て風が起ると例の角谷さんの木戸の空ヲ舞ひだつた。がたんといひらくと、ちから一杯叩きつけたやうに、びつしやりと乾いて横棧の浮いた木戸が、濁つた音響であたりをどやしつけて鳴つた。

「せめてあの木戸だけでも鳴らなきや助かるが。」

吉川さんはもう我慢がならないと、表に出て、角谷さんの木戸をしめ込んで手頃の石でおさへて置いた。それもすぐ石はずつて動き、相不變風をくらつては空ヲ舞ひをつづけた。吉川さんはしまひに大聲でこんなにはたつのが分らんか、と、さ

う嘸鳴つてみても、五十を過ぎた吉川さんの掠れ聲など、角谷さんの茶の間に聞えるものではなかつた。

「よそ様の木戸なぞ氣にかけないで、うちの開きでも繕繕したらどう。」

吉川さんの三尺板のひらきも、片方の蝶番が抜け落ちて、開けたらもう閉めることは、晩までできなかつた。吉川さんはそれを不手際な手付で直しはじめたが、米問屋を派手にやつてゐた吉川さんには、釘と金鏈の仕事はうまく打合せなかつた。かれの打ちつけるものは蝶番の不必要な平金ばかりで、そこにある釘の頭をうまく打ち當てることが出来なかつた。

「おい、こりや釘の頭が二本出てゐるのか見てくれ。」

きぬ代さんがしらべても、釘の頭は一本しかなかつた。

「釘は片側に二本づつ都合四本出てゐるだけよ。」

「どうも眼がちかちかする。」

きぬ代さんはだまつて縁側に行つた。そこで、こくめいに袋蜘蛛をあつめて入れ

た箱から、一疋づつ蜘蛛をつまみ出して、きぬ代さんは頬白に遣つてゐた。吉川さんを見ると怒つて續けさまに鳴いて、頭部の羽根を逆立てる頬白も、きぬ代さんの指先をおあいそらしく、小鳥らしくもない媚びたしなをつくつて、啄ついてゐた。吉川さんは小鳥のそばを通りあはせると、指で叩くふうをして見せるか、顔を近づけて眼鼻を釣り上げて脅かしたりするので、吉川さんの顔さへ見ればヂヂヂと高鳴きのこゑをあげた。怒りつばい頬白はすこしも遠慮なぞはしなかつた。

けふも野田さんは落ちた毛蟲をことごとく、角谷さんの庭に掃きおろし、ついでに大谷石の上にあるのも弾みをくはして、角谷さんの庭に飛ばしたが、その中に茶の間の前にぼとりとおちるやつもまじつてゐた。茶の間で息を殺して様子をうかがつてゐるやうなおくさんは、じれた氣持を耐へて野田さんの箒の止む音を待ちまうけた。

「こんな櫻は伐つちまへばいいんだ。まるで毛蟲の巢だ。これまで掃かされるん

では耐らん。」

野田さんのさういふ聲がおくさんに向つて話されるのが聞え、野田さんによつて一疋残らず毛蟲を掃くつもりらしかつた。掃かれておちた毛蟲は、小松菜の上によちのぼり、柔らかい葉をくひはじめた。角谷のおくさんはもう野田さんが垣境をはなれた時分に、わざとらしくそつと庭に下りると、一應、大谷石の垣境を見上げ、たしかに野田さんがゐないのを見ると、先刻から耐へかねてゐた鋭い氣合から、ふいに一疋の毛蟲の大きいやつをはさむと、それを野田さんの庭を目懸けて抛り上げた。毛蟲は虹狀の圓を系がいて野田さんの庭に、うまく、ほとりと落ちた。おくさんはそれだけでは煮えた氣持がおさまるものではない、次にはさんだ一疋にも、野田さんの芝生を蝕ひ荒すか、きたならしい唐紅のダリヤの花の莖をくひ折るやうにいひふくめて、さらに、別の一疋を抛りあげたのであつた。

「そちらに落ちた毛蟲はそちらの毛蟲だ。みんな元にもどしてやる。」

彼女はていねいに今度は毛蟲を一疋づつ抓んで、箸の先で大谷石のうへに這はせ

るやうにして、こまかい脚をくつつけた。こまかい脚の吸盤は角谷夫人の猛り立つた心を體たいして、みなびつたりと大谷石のうへに止まり、そして上へ上へとのぼりはじめた。横這ひのものはその位置を直してやつた。毛蟲は凸凹のある這ひやすい石をのぼつて行つたが、根氣好くつまんで最初に這はせた毛蟲は、もう大谷石のいただきに登りつめふたたび野田さんの芝生の中にはいり込んだ。角谷さんは庭ぢゆうの毛蟲を這はせるつもりか、石垣は赤と黒の毛のある毛蟲が伸びちぢみながら陸續として、みだれを打つて石上に美しい極印を刻した。おくさんの額は汗とあぶらで、てらつき、ちひさいながら眼はつかれてかすれたやうになつて行つたが、それでも彼女の悲しい作業の箸の手はとまらなかつた。息切れさへ聞えるまでに氣ほひ立つた彼女は、つまんで這はせる毛蟲の或る一疋は、どうしても箸の先から石の上を持つて行つても取り付かないやつがゐた。あせる程、毛蟲はころがり落ちて、いふことを聞かない。それを何度もさうやるので、美しい毛蟲のからだはくたくたになり、もう生氣すらなかつた。彼女もしまひに一疋の毛蟲が何疋にも見えるほど、眼がっ

かれてしまった。その擧句、おくさんはおちに指先でつまんで下の方から、野田さんの庭に投げ上げた。それほど毛蟲の怖いことなぞ、野田さんへにくしみにくらべると、何でもないふうであつた。彼女の作業がやつと終つたところに朝日は、角谷さんの庭一面に照りつけ、おくさんは小松菜の葉の泥をこまかく、ふるひ落した。それらは上の方から掃きおとしたものだから、たいていの葉は泥砂をかぶつてゐないものがなかつたのだ。おくさんはいつた。可哀さうに何のつみもないあなた方まで、よごしくさつた。可哀さうなあなた方の仕返しをどうして上げたらいいかと、彼女はしよぼしよぼにつかれた眼を手の平でこすつた。

野田さんはふとどの毛蟲も一樣に、大谷石の垣境から歩いてくるのに眼をとめた。櫻の枝から下りてくるのよりも、垣境から次から次へと三々五々につらなつて這ふ毛蟲は、何處から移行してくるのか分らない。はあて、と、野田さんは庭に下りて垣境まで行つて眺めた。どの毛蟲の毛にも泥がついてゐて、大谷石の下の方から登

つてくるのが分かり、それは大變な毛蟲の數だつた。そこら一面に赤と黒の縞のある背中を見せた蟲けらは、みな野田さんの芝生をめぐけて這ひ歩いた。野田さんは少時見てゐるうちに角谷さんのおくさんが、井戸端から廻つて来て、野田さんの顔を見ると、ひよいと袖垣の裏側に隠れた。その袖垣の下の方に、二本づつの眞新しい箬が立てかけてあるのを見つけた。ふん、あの箬の先にはさんで下の方から大谷石に這はせると、ちやうど毛蟲の頭は庭の芝生に向ふことになる、あのばあさんが根氣好く毛蟲を這はせてゐたのだ、野田さんはここまで考へると、袖垣の裏側にまだ凝つとしてゐる角谷のおくさんに聞えがしに、やや嘔鳴りごゑに近い聲でいつた。

「毛蟲はみんな返してしまふから幾らでも投げ込むんだね。」

野田さんは勝手に行つて竹箬を持つて来ると、片ツ端から這ひすり廻る毛蟲を角谷さんの庭に掃きおろした。ばらばら落ちる毛蟲は、しばらく地上ではじつと痛さうに動かなかつたが、間もなくうごきはじめた。

「何て眞似をなさいます、うちの菜ッ葉は泥まみれになるぢやございせんか。」
角谷のおくさんは袖垣から出ると、正面切つて言つた。

「元來櫻はお宅の櫻だ、毛蟲の始末ぐらゐしたらいいでせう。」

「人の庭にごみを掃きおろすといふことがあるもんですか、掃き溜ぢやございせん。」

「それぢや櫻の木を伐つて貰ひませう。」

「誰が櫻を伐るもんですか。」

角谷のおくさんは怒り過ぎて、聲が出なかつた。

「何だこんな櫻くらゐ。」

野田さんは突然竹箒を上げて、櫻の下の枝をはすかひに拂つた。

「女だと思つて失禮なまねをなさる。」

「人の屋敷に毛蟲を投げ込むやうな女がゐますかい。」

野田さんの疳癩は上づつてこんな櫻が何だと、氣狂ひのやうに小枝をはたき出し

た。ちよつと手がつけられない狂態であつた。

その時分、角谷さんは崖の方で、崇嚴寺の寺男の刈本さんと立話をしてゐた。道路と畑を隔てて野田さんの屋敷が見え、庭が見え、そして野田さんが怒つてはたく櫻の木がまるみえに見えてゐた。

「奴を怒らせると煩さいのに、うちの奴も悪い種子を蒔いて了つた。」

角谷さんは困り切つた顔つきで、仲の悪い野田さんの狂態を見ただけで、後々の煩ささが思ひ遣られるふうだつた。

「どうも野田さんといふ人は不思議な人ですね、相當の暮しをしてゐながらあんな事をする人はめづらしい。」

「野田さんが何かしたんですか。」

刈本さんは或る日驛の通りでバスを待ち合してゐた。五人先の行列に野田さんがゐて、そこに何の空箱だか二個重ねて置いてあつて、その上に麻繩が一捲き置かれてあつた。手づれのした荷づくりには好箇の麻繩だが、たつぷり三間くらゐはある

らしかつた。誰の物とも分らないが、行列にゐる人の持物でないことだけは、その前の行列がみんな乗つてしまつてからも、まだ置かれてあるので分つてゐた。恰度、そこに野田さんが立つてゐて、右の手がらくに空箱に乗るやうな位置であり、野田さんは何度も麻繩の上に曖昧に調戲ふやうに手を乗せかけてゐたりしてゐた。しかしそれは野田さんの麻繩でないことは分つてゐたものの、知らない人は或ひは野田さんの麻繩であるかも知れない、とまで見える、あやふやな時間の經つごとにそんな感じを人にあたへる程、野田さんは麻繩をかまひたがつてゐた。バスはなかなか來なかつた。そしてゐるうちに、突然に北屋敷行きバスが折返して來たので行列はそれを合圖に亂れを打つてくづれた。野田さんのまはりの人も行つたが、野田さんだけが居残つてゐた。その筈だつた。別のバスが、近々と急速度に駛つて來るのが、坂の上に見られた。そして、客はふたたび亂れを打つたのであるが、刈本さんは氣がついたときには、麻繩はもう見えなかつた。

「どうも不思議な氣がしましたが、野田さんはあんな麻繩をどうなさる方ではな

い、しかし麻繩はない……」

「世の中には思ひの外のことがありますよ。」

角谷老は煙たい顔付でさういふと、皮肉に笑つた。

刈本さんは界限でちよつとした野菜を仕入れ、それを配つてはすこしの利益を見て生活の足しにしてゐる男であつたがかれはそのほか、紫檀の板きれとか、電氣のコードとか、古釘とかも、そのいる家に分けてゐた。別に金をとるわけではなかつた。

「野田といふ男はうちの庭に自分の宅のゴミを掃きおとすんで困りますよ、それを家の者がまたゴミはゴミで竹箆返しに投げ込むといふ始末で、ごたごたが絶えないんだ。」

「女の人はいれでなかなか曲り出すと、きかぬ氣では男も適ひませんよ。」

刈本さんの老妻は胃腸を永くわづらひ、刈本のかせぎは何時も醫藥にくひ込まれてゐた。よく遣つてゆくといはれる刈本さんは、盆と暮との墓參時には、門ぎわの

番小屋の土間にそれぞれの季節のお花を仕入れて、それを墓参の人にさばいてゐるが、仕入れが何百圓になるくらゐであるから、賣上げはその何倍かにせり上るはずだった。寺の門の前の植木屋のむらさんが、そんな事情を知らずに、お寺の門の前だから花と線香とを用意してみたが、ちつとも賣れなかつた。永い間のおなじみの参詣人はみな刈本さんの花を買ひ、線香らふそくを購つて詣つてゐたのである。植木屋のむらさんがどうもおかしいと、内々さぐつて見たが分らなかつた。或る朝、刈本さんが夥しい花を背負つて寺にはいつて行つたが、両手にらふそくの箱包と線香らしい包をさげてゐた。いまままで些つとも氣がつかなかつたが、むらさんは、井戸端にゐる女房に聲をかけた。

「けふは幾日かな。」

「十五日ですよ。」

「なるほど、十五日の紋日か。」

此前刈本さんが花を仕入れて搬んでゐたのは、どうも朔日らしかつた。十五日と

朔日に花を仕入れるのでは、お寺のなかで花を賣つてゐるのだ、これは此方から手を引かないと、刈本さんにも近所の手前も悪い、むらさんは引越し早々のことであり事情も分らなかつたので、その日から花と線香の箱を引込めてしまつた。二三度買つてくれた客にはそれとなく裏から切花を賣るくらゐにして、むらさんは氣前よく客があると、花はお寺にありますといつて、仕入れ損にはなつたが、線香はそのまま賣らなかつた。

或る日刈本さんはむらさんの店に、花も線香もならべてないのを見ると、ははん、氣が付いて呉れたか、なかなか話せる男だと、ぶらりと夏大根を一束さげて這入つて來た。

「飛んだご迷惑をかけましたね、切角、仕入れた品物だけを譲つていただきに上つたのですが。」

と、刈本さんは卒直にさういひ、實は先代の墓番から、ずつと引繼いで花と線香をさばいてゐるのだが、寺では給料といふものは出して呉れないので、花の賣上げで

わし共は遣つてゐるのだといった。

「引越して来たばかりで何も知らなかつたものですから、お詫びに上らうと、けふも家内にさう言つてゐたところですよ。」

「お宅の前を通つて花もお線香もないので、これは御損をかけたと思ひましてね。」

「ぼんくらでちつとも氣が付かなかつたんです。」

「ところがですね、お宅で切花とか生花とかを賣るお考へはないんですか、この界限にはそんな調法な店が一軒もないんです。そして頂けばわたしが話を振ち込んだやうにも思はれませんし、わたしの氣も樂になるんです。」

「なる程、生花の材料をさばく店がありませんね、ひとつ考へて置きませう、こんどはあなたと話合ひがついてゐる譯ですから。」

「そんなお考へがあるなら永年取引の花問屋にご紹介もしてお互に氣が樂な仕事をしたいものです。」

話はすぐまとまり、花種もいいのを廻させるといふ刈本さんは、案外、植木屋の

手きびしい繩張りも言ひ出さないうまく性が合ひ、圓く凡てがをさまつたのであつた。話がこじれたら、一揉み揉まねばならない筈のものが、兩方の頭をいためずに済んだので刈本さんは、嬉しかつた。

夕方近くなつたので刈本さんは低い聲でいつた。

「お宅ではこれは（刈本さんは盃を持つ手つきを手でしてみた）問題になることはないんですか。宅では何んだ彼だといつて煩さいんですが。」

「宅でもいひますが構ふもんですか。」

「ではあなたは坂の下あたりでぶら付いてゐて下さい、金を用意するのに、ばあさんの眼をかすめなければならぬから。」

刈本さんは一足先きに店を出て行き、むらさんは女房にはまだ話してゐない垣根の仕入れの金を、幸ひ、坂下で手付代りに受とる目算を立てたので、あれを廻せば今夜の間に合ふと考へたのであつた。この不思議な二人は坂下で待ち合せると、映画館のある混雑した狭い通りの、もつと狭い飲屋にはいつて行つた。刈本さんもむ

らさんも、酒といへば眼がない方で執方も奢る氣合だつたから、酒は二人をけふつき合つたばかりだとは、どう見ても、他人から見えなかつた。

刈本さんは女房さへるなければ、盆とくれとの収入では、盆は草取りの十人入れも、そんな事はわけはない、暮は暮で墓掃除の女人夫を入れ、ついでに自分の住む小屋の掃除をさせても、それも數の内でないといった。ただ女房が業病をもつてゐるからみな藥代になつてしまふといった。刈本さんの話から考へると參詣人のばら撒く金でも、一年を通じて千圓や二千圓ではないらしかつた。

「皆さんが先祖の冥福を祈りに來なさるが、わたしは女房の命乞ひを神佛に禱る氣なんか起りませんよ、冥福をいのつて永生きされた日にや、一生稼ぎとほしでも酒一杯飲めやしない。」

おなじ考へのむらさんも、その點では全く刈本さんと同じ説であつた。

「何をするにも目の上の瘤といふ奴があるが、女房といふやつはどうも邪魔氣だね、このごろ氣を付けてゐると女房と自分とでは、食物の量がちがふね、すくなく

とも、どこかで女は亭主より餘計に食つてゐることは實際だね。」

刈本さんはたちまち賛成した。

「自分が餘計に食ふといふことは本能だし、その量をはかる役目をもつてゐるから耐らない、どうしたつて食はれてしまふよ、それを凝つと見てゐることは毎日のことだから辛いね。」

「ところがここに妙なことがある。たとへば女房がお給仕をしてくれるのと、子供が盛つてくれるときとを比べると、女房の方がどつきりくれるし、子供はきびしくてなかなか餘分はくはさないやうです、やはり女房といふものは死んでくれればいいと考へても、子供とはちがふね、子供とは親しさがちがふのか知ら？」

「いや、それはたしかに子供より女房の方が盛り方がちがふね、おれの家ばかりかと思つてゐたらお宅でもさうですか。」

刈本さんとむらさんは、ひよんな事から女房の美點に打つかつて、さすがに愉快になつて大聲で笑つた。そんな美點にあやかることなんか薬にもなかつた今夜も、

そこに打つかつて見て嬉しくないことはなかつた。いざ勘定といふことになる二人は大きな紙幣を出して、わしが拂ふおれが拂ふと少時揉み合つてゐたが、刈本さんはそれちや今夜ははじめて飲みあつたのだから、器用に半分づつ拂はうぢやないかといひ、むらさんもそれがよいといった。

二人はもつれながら寺の前までくると、むらさんがいつた。

「今夜はあなたが奢つたことに女房にいつておきますよ。」

「わたしもあなたにご馳走になつたことにしよう。」

二人はそんなふうになつて別れた。

刈本さんの一つの苦勞は少しらくになつた時分に、例の妻君に寝られることだつた。殊に紋日近く手のいるところに、彼女は朝から少しお腹が痛いといつてはよく休んだ。それも、季節がはりに起る業病らしく、盆と暮の不時の収入もふくめて、そつくり往診、家政婦、薬といふやうに小出して、氣の付いたときはそつくり持つて行かれて了つてゐた。こんどの盆の分もまたふいだ、刈本さんは寝てゐるおばさん

の枕元から立ち上つてさういふと、何をしても手もとどかず樂にはなれなかつた。

或る日、角谷さんがこのごろお内儀さんの容子はどうかと、世間の評判では、刈本さんは家内を大切にするし、なかなかあれ程にはめんだうは見られぬものだといふことも、つい、お世辭に交ぜていはざるをえなかつた。だが、當の刈本さんは妻君のことになると、心底から嫌氣で慄毛立つて、こちらは、とうに思ひ切つてゐるのに悲願もいまだ通じないやうに低い聲でいつた。

「今度こそ死んで呉れると思ひましたが、たうとう恢復つて了ひましたよ。」

角谷さんはいやその事なら、こちらも、なかなか死んでくれないといつて、悲しげにはははとやけに笑つた。

「思ふとほりにきちんと片がついてしまへばいいんだが、どつこい人の命はさうはいかん。」

「お宅などはいいが寝られると、ありつたけ使ひ果されるんで働きやうがないんです。全くあれには困り者です。」

刈本さんは戦争の混雑最中だつて不用の命はたすかつてゐて、いりよりの命は亡くなつてゐると、損と苦しみは自分だけで引受けてゐるやうな顔付であつた。

「いや女房といふものもここまで来ると食物はぎうぎうに詰められるだけ詰めてゐて、自分は勝手に大半つまみ食ひで仕上げてゐるといふ始末だ、何の事はない、こつちの食ふ分まで遣つてゐるんだから耐らない。」

角谷さんが、配達が生葱を嚙つてゐたのを見て、すぐその後でよその畑の葱の白根を嚙んでゐたとかいふことも、どれだけ信じていいか分らないが、空罐詰を足で蹴飛ばしてゐた角谷さんが制限される食物は、思ひの外の窮屈以上のものらしかつた。かすかすになつた五十女の身だしなみか何か知らないが、米のとき汁をぬりこつた角谷のおくさんは、毛蟲を野田の庭に投げ戻すくらゐは何でもないことだつた。臺所に角谷さんがはいることは禁じられてゐるものの、つい、用事でもあつて這入つてゆくのを見るとおくさんはきびしくそれを咎めた。

「お勝手には出て來ないで頂戴、出て來られるたびに物がなくなります。」

「おれが何か食べるとでも思ふのか。」

「胸の上に手を置いて考へてみたら分るぢやないの。」

「胸の上に手を置いたつて……」

角谷さんは胸の上に手を置いて見ても、なにも、分るものがなかつた。

「べつに何も考へがうかばないよ。」

「何言つてゐるの、恩給は臺無しだしさ、畑の手傳ひでもして戴かなくちや遣り切れないわ。」

「畑は一日遣つてゐる。」

「お寺に行つてあそぶか、映畫の招待券ばかりさがしてゐるぢやないの、畑のあつたなしで五百圓から千圓もちがふことがお分りにならないんですか。」

「千圓もちがふかい。」

「千圓もちがふかいなんて途呆けてはこまるわ、畑のもので生きてゐるんぢやないんですか。」

角谷さんは近隣合併でかりてゐる畑に、一日暇さへあれば追ひ遣られてゐたが、それもどういふ見榮からであるのか、通行人があると畑物を見物してゐるやうな例の風體をよそほひ、人がいつてしまふと草取り土蔽ひなぞしてゐて、人がくるとまた立つて両手をくんで悠然と、畑を見渡してゐた。かんじんの畑仕事よりもそんな風に装ふことで、勿體ない時間が経つて行つたのだ。勿論、これらの悲しい見榮とか街ひとかいふくせを知つてゐるおくさんは、それが大の嫌ひであるよりも、いらして見てゐられなかつた。

「畑をすれば他人の事ばかり氣にして蟲一疋取れはしない、誰が見たつて恥かしいことがあるもんですか。」

角谷さんは毎度のことで、對手にならなかつた。

「お八つはまだか。」

三時になると、角谷老は茶の間に覗き込んだが、おくさんは嘖き出すやうにして、きめつけた。

「今どき何處の家をさがしたつてお八ッなんかあるもんですか。」

「何かちよつとつまむ物がないか。」

「そんな氣の利いたものがあるもんですか。」

彼女は大豆の煎つたのをほりほり前齒でかみながら、刎ねつけて了つた。しかし、子供のやうに腹の減る角谷はただないないでは、諦められなかつた。

「それを少し、……」

角谷老は大きい手をひろげて、さし出した。

「あなたの分はきのふ召し上つたぢやありませんか、これは、きのふのわたくしの分前ですよ。」

「おれのも少し残つてゐた筈だ。」

「そんな物をのこすやうなあなたぢやないわ、よく胸の上に手を置いて考へて見るがいい。」

角谷老はひろげた手を引つ込めないで、また胸の上が出たと思つた。



「ちよつと寄越せ、ちよつと。」

「うるさい方ね。」

ばらばらと撒かれた大豆は、ほんの、七八粒しかなかった。たつたこれほつちかい、さういつてまた角谷老は手をひろげて差し出した。

「いい加減になさい。」

横拂ひに角谷さんの手は、おくさんの厳しい手のひらで拂はれてしまつた。角谷老は、しかたなしに畑に出て行つた。そこに、吉川さんが自分の家の前の往來ぎわに作つた、ほそ長い、埃まみれの青菜の手入れをしてゐた。戦争時分から大道の端にたね物をまくことがはやつて、吉川さんでは畑がないので、一層重寶がつて精出して作つてゐた。この間見たときはずつと瘠せ込んでゐて、悪い胃の工合が他人が見ても、餘程悪くなつてゐるらしく思はれた。

「どうも歩くと痛み出しましてね、それに食べ物を見ればつい手を出してしまつて困つてゐるんです。」

吉川さんは顔を顰めていつた。胃は下がつて定つた時間にくるいたみは、もう、五月にも及んでゐた。

「つまむ食べものがある間はまだいいんですよ。」

先刻拂はれた手の平の泥をこすり下ろして、角谷さんは誰にいふあてもない諷刺ひにくを言つて笑つた。

「それは譬へにすぎないんです。家なんか大豆だつて一粒もないくらゐです。」

「全くあるものは命だけですな。」

「その命もどうなることか分つたものぢやない。」

吉川さんは幾らかやけ氣味だつた。食はなければ食はないで痛み、食へば食ふで痛むといふ厄介千萬な潰瘍状態の胃の工合は、たうてい吉川さんの収入ではをさめ切れるものでなかつた。手當しなければ悪くなる一方だつたが、それを知つて手當をしないのは、孰れは危険期の手痛い目を承知のうへであるやうなものだつた。

「どつちにしても來年の春はお目にかかれるかどうか、危ないものです。」

吉川は大聲をあげて笑つたが、角谷老は別人が笑つたやうで氣味が悪く、下る下るといふ胃袋の重さまで見える顔つやの悪さも、けふは異様な感じであつた。

「たとへばですな、魚の小骨を一本見出しても、びりつとしますよ、肺病なんぞなら幾らでも食べられる楽しみはあるが、胃病も私のやうになるとまるで梅酢のやうに酸ばい汁ばかりが、がぶがぶ鳴つてゐるんです。」

吉川さんは腹のうへを撫でて見せて、痛なら相當大きくなつてゐる筈だが、昨今嘔氣がついて來てどうやら大かい奴ができてゐるらしいが、できてゐるならゐるで、どうしても勝手にしろといふ氣持だと、口ではさういふもののその正體は決して見たくないやうな顔いろの不安さを避けられなさそうだつた。

「じつくり醫者にも診てもらつたらどうです。そのまま打つちやつて置くのは亂暴ぢやないですか。」

一醫者の往診の夢ばかり見つけつけてね。ゆうべはででむしのやうな奴を胃ぶくろから掴み出された夢を見ましたよ、腹が立つて握つてみると冷たいの何のつて

飛びあがるくらゐでした。」

吉川さんの溫和な顔は筋ばかりに弛んで見え、角谷さんは我慢できないくらゐ氣味の悪い凄みが、顔の筋の間を蒼みをみせてつたつてゐるやうで、こんなふうだと人間は生きてゐられるものではない、死に近づいた人間はみんなこんなふうなことを言ふものだ、と、角谷さんはぞつととして挨拶もそこそこに別れてしまつた。

野田さんは幾ら掃いても、退治しきれない毛蟲を箒の先に引つかけると、それを勢ひ切つて角谷さんの庭にはじき飛ばした。その一つが縁側の上にほんと落ちた。たまり兼ねた角谷さんは飛び出しさうにすると、おくさんがいつた。男のくせに一度は叱りつけたらいいでせう、家で口惜しがつてゐたつて初まらないぢやないの、と、嘯しかけるやうにいつた。效を奏したのか溫和しい角谷老は、庭に出て行つた。

「どうも毛蟲がついてご迷惑でせうが、そのうち櫻の枝は下ろす考へなんです。」
何をいふかと思へば謝まつてゐると、おくさんは口惜しがつて、不意に咳をして

注意して見せた。

野田さんはこの人らしい強い睨みと峻のある眼付で、下を見おろしていった。

「その内といはずに蟲のついてゐる間におろしたらどうです。大變なくそです。」

「もう一度花を見てから下ろしませう。いざとなると、枝振りもなかなかいい木ですから。」

「枝振りなぞどうでもいいんです、第一毛蟲といふやつは一度見ると、飯もうまくなくなる奴だ。」

野田さんは角谷老の出方が柔らかだったので、すっかり機先を制せられて「ひ、怒り出すわけにゆかなかつた。」

「ではお宅にさし出してゐる枝だけ下ろして見ませうか。」

「さうして頂けば助かりますが、お手傳ひしてもいいんです。」

「梯子と鋸がいますな。」

角谷老が納屋に廻らうとすると、その厠の角にがたがた顛ひをして待ち伏せてゐる

たおくさんが、前に立ち塞が^{かき}つて通せん坊をしていった。

「櫻の枝をおろすなんて莫迦な真似をする人があるもんですか。」

「一そ枝をおろして下へば兩方圓くゆくぢやないか。」

「あんたに誰が仲直りに立つてく^{くだ}さいと言つたんです。」

「誰もいはないがわしはさう計らひたいんだ。」

たおくさんは一段と怒り直した。

「わたしはいやです。人の家とゴミ箱との區別も分らん人と誰がすなほに交際へるもんですか、あんたたら、ほんとに意生地な^うした。」

「ではどうする。」

角谷老は困つて了つた。

「どうするもかうするもない、わたしが不賛成だといへばそれでいいぢやありませんか、言へなきや、わたしが行つていつて遣る。」

「いや、おれがいふ。」

角谷老は梯子もかつがないで、すごすごと垣境に引き返して行つた。そして彼は極り悪るさうに頭を掻きかきいつた。

「どうも枝を下ろすことは家内が不賛成でしてな。」

「ちやお止めになるんですか。」

野田さんの聲が鋭どくなつた。

「まあ、そのままにして置かうかと思ふんです。」

「梯子も鋸も家にあるんだが。」

野田さんはもう一度誘ひをかけて見たが、一度ひしやけた角谷老は二度とひるがへす勇氣はもたなかつた。

「やはりもう一度花を見てからにしますよ。」

「そんなに奥さんにびくびくしなくともいいでせう、第一、あなたの奥さんがいけない、毛蟲を人の屋敷に投げ込んだり追ひ込んだりするのが、常識のある人のすることではないんだ。垣隣に居ればお互に我慢することも多い譯です。」

角谷老はちよつと茶の間の方を振り返り、そこに彼女の顔が見えなかつたので低い聲で、いかにも人の善い氣の小さい人のやうにいつた。

「あれには全く困つてゐますので、……」

野田さんもさういはれると、衝き込んでいふわけに行かず、といつて無闇に調子を弛めることも、威信ある男のすることではなかつた。

「どうも女も年をとると古狸こびりのたぐひです。」

「全く古狸です。」

角谷老は來春、花どきに花をとるふうをよそほつて、大枝をばつさり遣ることにしませう、さうすれば、あれの手前もうまく行くし、お宅にも毛蟲でご迷惑をかけずに済みますからと八面玲瓏にいつた。

「切角さういつて頂くんですから、來春是非一つ願ひしたいものです。」

「なかに留守のあひだに遣つてしまへば譯のないことです。留守の間に見てゐるわけに行きませんからな。」

角谷老はあはははと笑つた。

茶の間に耳をすました夫人は、耳まであかくいきらせ、ぎちぎちして角谷老のもどつてくるのを待ち入つてゐた。

角谷老が茶の間に戻つて來た時、夫人は殆ど無表情の冷靜さで、角谷老の顔をひとわたり眺めてからいつた。

「いま誰方とおはなししていらつしたんです。」

氣の毒な角谷老の顔色には、失敗つたといふ叫びが感じられるほど、いち早く變つてみえた。

「べつに誰とも話してゐなかつた。」

「嘘仰有い、野田さんとわたくしのことを、こりだと話してゐたぢやありませんか、こりとはなんです。」

「こりなんて言ひはしない。」

角谷さんは子供のやうに頬をふくらがして見せた。

「こりつてのは古狸ふるだぬきとかくんでせう、よくもあんな野田さんなぞに自分の家内のことを古狸だなんていへたものですね、恥さらしにも程がある。」

「そんなことを言つた覚えはないさ。」

「此處に居れば垣どなりで何をはなしてゐるくらゐは、ちやんと聽えてくるんです。何ておべつか爺さんだらう。」

角谷さんは口煩さい夫人のそばから放れようとしたが、夫人はもつと話すことがあるといつて引き据ゑようとしたが、角谷老は茶の間にはいらすに表に出て行つた。

「浮かり喋つてゐられもしない、何處にでも、あれの耳がある。」——實際、角谷さんはおくさんの眼が何處にでも凝つと見てゐて、何時何處で何をしやべつてゐるかといふ事まで、すつかり見すかされてゐるやうな油斷のない眼配りが感じられた。家の中ではもちろんだが、往來でも横丁の狭い通りや、通り抜けや畑の葱坊主の間にも、夫人の小ちやい顔が見えて來て、どこにも、くつろいでゐられないものを覺えた。坂下で大豆を頬張りながら上つてくるとこんな時に運うんわるく出會はしたらこ

まると思つてゐると、郵便局の扉をぎいといと開けて出たおくさんに、はたと顔をあはすことなどもあつた。全く天通自在のこまかい鋭い眼付が、角谷さんの生きてゐるぐるりを取りまいてゐるやうでならなかつた。「あれの眼の見えないものなんてないのだ。」

角谷さんは崇巖寺の石段を登つて行つた。例の刈本さんはその風流なともいへる小屋がけのなかで、お茶の前のお湯を沸かしてゐるところだつた。昔からある長屋門をつくりかへた番小屋のなかは、しつとりと落ちついて奥の三尺障子の高窓に午後の日があたり、何時でもお茶がはいるやうになつてゐた。刈本さんは花に水を噴く仕事をおへたところであつた。

「いらつしやい。」

「こんなに落ちついて暮してゐたらいいね。」

「これは表^はだけの景色ですよ、面白くもないことばかりです。」

しかしと角谷さんは考へた。家内のかたがついてくれればいいといふ刈本さんも、

それをさう知りながら一杯のお茶を愉しむことが、角谷さんには出来ないことだけに矢張りたのしさうだつた。

「わしもいまがいま追ひ出されて來たんだが、刈本さん、あんたは女房の眼がそこらぢゆうに見えて來るやうな、そんな氣がしませんか。」

「そりやもうお金の勘定なぞしてゐると、すぐ手の甲のうへにあれの眼が吸ひついて來るやうな氣がしますよ。」

「手のひらの上ですか、あははは。」

と、角谷さんは心から嬉しさうに笑ひ、そして、笑ひがをさまつたころには、元の悲しさうな眼いろにかへつた。

「どんな優しい女でも一たん一緒になれば、背中がむづ付く程、眼にある刺がちくちく螫して來るものです、煩惱百代にかよふといふ奴です。」

「あんたでもさうかな、一生拷問されとほしのやうなもんだなあ。」

「生きてゐる間ぢゆう憑いて廻つてたつてゐるものをお互様が一人づつ選んで

来たやうなものです。賭博だつて負けどほしにされても、一度や二度はどんな下手でも勝つことはあるものだが、あいつだけは一生負けどほしですよ。下手なものを若氣の至りで選んだものです。こいつは耐らない、あははは。」

「いや全くだ、あははは。」

寺領の喬松の枝のしんにある花粉は、ほんの少しのそよかせにも黄卵のけむりを吐いてゐて、彼等枯野にゐる二人のたまにわらふ笑ひ聲を、つつぬけに寺領一杯にひびかせた。

「いいお茶だ、どこの茶だね。」

「これもやみのお茶ですよ、お茶一袋さげて歩いても捕まりさうな氣がするのは、誰のせりですか、まるで四方で手足をしばられてゐるやうなものですね。」

「うっかり歩いてゐても、おい署まで来いなんて未だ言はれてゐるんですね、何とかならんもんか。」

角谷さんは何杯もお茶をのんでいい氣持になり、本堂前で柏手を打つて頭を下げ

た。いくら頭を下げてみたつて戦争はどうにもならなかつたから、角谷さん自身も身の安逸などにあり付くものではなかつた。それをさうと知りながら柏手をやけに打つて見るのも、つけ景氣の見えすいた氣持だつた。

吉川さんが遂々亡くなつた。お葬ひの日はすでに夏がおとづれてゐて、初蟬のこゑがうす甘い晝寢をさそひ子供時分の思ひ出をさそうた。かたばかりの式ではあるが皆それぞれにおまわりをし、刈本さんが葬ひの世話をしながら角谷さんについてた。

「昔は放鳥だの花束だのとさわいだものだが、いまは金びかの自動車も見られなくなりましたね。」

「事は簡單なほどがいいんですよ、なあに死んじまへば金びかもリヤカーもありやしない。」

角谷さんもなこの紋付を着て、來合せた野田格之進とあいさつをした。野田さんは氣取つて碌々刈本さんにはあいさつをしない、刈本さんも知らぬ顔だつた。植木屋のむらさんも野田とは物もいはずに、そばから、はなれてしまつた。刈本さん

はむらさんに近づくと、あの野郎、わたしを見てふいと顔をそむけてしまつたが、それは例の麻繩の一件をそつくり見てゐたからなんだ、あんなに氣取つてゐても、往來でおちてゐる物は何だつて拾ふくせのあることは、わたしはみんな知つてゐるんですよ、見なさい、誰一人だつて近所の人は寄り付いて行かないぢやないか、そんなこともちやんと知つてゐるくせに、ぬけぬけしてやがるといつた。

野田さんは角谷さんにちかづく、實はこのあひだのことですがね、と、例の下水のことを強引にいつた。

「僕の家の下水よりも先隣の水田さん、それからもう一軒先の友成さんの分が一緒になつて、僕の家の前を流れて行くもんだから、いくら掃除をしてもしきれないんです。お宅のおくさんは僕の家のをせいにしてゐるんですが、そんな譯で手のつけやうもなく汚れてしまふんです。」

「なるほど、ごもつともな事です。」

角谷さんもそれに氣付かないわけではなかつた。併し前を流れる下水のみなもと

をすつと家々の間にさかのぼると、大通りの雨水をくはへこんで、大雨のときは一すぢの小川のせせらぎを作ることになつてゐるから、何處にその難題を持ちこんでいいか分らない、區役所に行く前に町會にも話し合ひをつけなければならなかつた。「そこです、あなたがそれぞれの家を廻つて下さるわけに行かないでせうか。」

「そんな事は手もないことです。」

角谷さんは譯もなく引き受けた。野田さんはそこで大きく指導的にその手順をしへたが、時々、妙なことに引つかかつて、そのことで本人の知らない間に皮肉くる癖のある角谷さんは、例のとぼんとしたなかから偶然に一撃をあたへた。

「先づ町會に行つて話をしてですね、話がまとまらなければ區役所の工事課にでも行くことにしませう。」

野田さんは驚いたが、話はそれが本筋であつた。そんなに問題をひねくり廻すと、やはり野田さんは三度に一度は角谷さんの前の溝浚ひもしなければならなかつた。

「町會にまで行かなくとも各自の家々で解決がつくことぢやないんですか。」

「こんな問題は町會でできた方が早わかりです。個人では感情的になつて揉みあふばかりですから。」

これには、野田さんもつい口ごもらぬわけに、ゆかなかつた。けれども、氣の好い角谷さんを動かすことに、野田さんは断念しなかつた。

「町會にあたつて見ることにしても、上隣の家に話して貰ふことだけではお托みしますよ。」

「まあ何とかしたいのですが、町會に話してからにしませう。」

頑固に何時になく反對した角谷さんは、用事ありげに後ろを振り向くと、野田さんの傍をはなれてしまつた。誰も話し手のない野田さんは、にがり切つて一人で立ちつくしてゐたが、すれちがひにむらさんの顔を見ると、かれは愛想らしく何時になくいつた。

「吉川さんもお氣の毒でしたね、どうも、顔色が悪いとはかんづいてゐたが斯う早いとは思はなかつた。」

けふに限つてしたしきさうに物言ふ野田さんも、話對手がないので困つてゐると、そんな僅かな肚を見たむらさんは、柔しい顔付などはしなかつた。

「さつさと先きに死んだ者は、見聞きしない厭らしさを外しただけでも、こんな世の中では徳をしたやうなものですよ。」

「さうでもあるまい、生きて居れば生きてゐるだけのものがありさうだが。」

「そんな吝みたれな氣で生きたつて生恥をかくやうなものです。なあに、さつぱりと命をほしがる奴にはくれた方が寝ざめはいいんです。では失禮。」

ぶりぶりしたむらさんは、野田さんを置き放しにして刈本さんのそばに行つた。かたばかりのお葬ひはしづしづと、小路から街道に向つて練られた。近くの人々だけでほんの少しの頭數しか寄らなかつた。

「何處のおとむらひにでも、まるでこの頃は通行人だつて振り返りもしなくなつて了つたね。」

むらさんは人間の死についても、格別の感應をあたへない戦争以來の冷酷薄情の

人心を嘆いた。

「いや、昔は犬でも猫でも、懇切なお經を上げ、車夫さんがはこんだものだが、白木づくりの棺と來たら昔の犬猫の棺の方がよほど清淨なものでしたよ、まア、當分人間の死なんでものは何處でも厄介物あつかひだよ。」

「安心して死ぬことも出来ませんよ。」

「安心して死ぬことも、横著のひとつですよ、心配しつくしてへとへとになつて死んだ方が、おなじ死ぬにしても早道といふことになるんだ。」

皮肉な刈本さんは、坂の下までくると、むらさんに、「わたしは此處で失禮する。」といつて別れたが、むらさんも、おれも用事があるといひ、後を追ひ駈けて行列をはなれてしまった。ただ一人、角谷兼太郎さんだけがまじめくさつて、白い街道を棺のあとについて、根氣好く禮節厚さうな顔をうかべて歩いて行つた。

山 驛

—

寫眞も撮れば時計も修繕する周兵は、誰も持つてゐないあぶらを一瓶持つてゐて、大てい腕時計はすぐ直して遣つた。器用な周兵は減金の仕事もできるので、長野にある小さい工場に、しごとをかついで出掛け、一泊して仕上げて歸つた。誰のもとはれてゐない時計がないやうに、周兵の修繕仕事は調法がられて、寫眞の方はほとんど撮らなかつた。

屋根をくり抜いて梓硝子を箆め込み、そこから明りを取り、障子にも硝子の小窓を切りこんだ。そしてそれらの工事は大工や建具屋の手をかりないで、自分で金尺をあてて作つたのである。周兵にはおよそ出来ない仕事といふものは存在しなかつ

た。さだ代が蓋物の蓋がないといへば、それをつくり、きびしい冬が来ると炬燵櫓は、古い帳場格子を見付けて来て、それで作った。炬燵櫓が配給になるくらゐの極寒地では、五月の若芽は炬燵櫓の上から、日毎に膨れるのを眺めるといふふうだつた。お寺の垣根直しもできれば、罐詰のから罐を延して平金とした周兵は、そのあき罐は西洋人街のはづれにある棄場で、目立たぬやうに拾つてかッ延したものであつた。そしてそれが周兵の家の雨漏りと庇を繕ふために、ことごとく繼ぎ目正しく、鱗のやうに高原の春日にかがやいてゐた。

周兵には實際できるのかどうか分らない自轉車の修繕が、するどい器用な、當つて挫けざるなきかれの指先で直されてから、自轉車の直しだけでも、頼まれればかからぬ譯にゆかなかつた。簡単なバンクのしごとはかれがこの土地にながれ込んだときに、何かの役に立つであらうと丹念にしまひこんだゴム糊によつて、すつかり彼のしごとに物を言はせた。焦土の中にも、一日一本の釘をひらふことに、花を捜すよりゆたかな、ないものがあると自分の好みが適つて、周兵のしごとに

釘の不自由をさせなかつた。釘を所蔵するといふことは、どんな仕事をもしあげるために、他人が艱難とする仕事を迥かに蹶ちらして成就させた。三挺のハリガネ切りを持つたかれの道具箱は、鑿、螺旋廻し、スバナ、プライヤ、錐、大小とりどりの五挺の鋸の外に、殆、普通の大工のつかふ道具で無いものはなかつた。もつと驚くべきことは、いまは絶対に入手艱難な膠材を二十本くらゐ持つてゐることであつた。つぎ物や、はぐれ物になくはならない今どきの寶は、無造作にひと巻に束ねられてかれの道具箱にあつた。周兵の指先は至るところで紙縫子が縫れるやうな迅さで、かかつた仕事をまかなうた。大寒にはいると時計屋は、寒國人のつねとして寒さに負けてしまつて、指が凍かんで細かい機械の中に指先がくぐれなかつた。だから二月と一月は修繕の仕事をしなさい。そして勢ひ、「郵便局の横丁にね、はりまやさんといふ人がゐるから頼んでごらんさい、若いから指が利くでせうから。」と、老時計商は惜氣もなく仕事をゆづつてゐた。實際、周兵は大寒にはいつてゐても、指先が凍かんでくるといふことがなかつた。蟲眼鏡をかけたかれは窓のそとが

べたべたに氷つてゐるのに、仕事机にむかつてゐても、指がきかなくなるといふことがなかつた。それでもかれは町の時計屋さんが態々ゆづつてくれる仕事を慮つて言つた。「少し暖かくなるまでお待ち願へませんでせうか、どうも私の手には負へさうもない修繕（お直し）ですから。」と、かれは仕事に遠慮をし、みんながみんな直すやうなことはしなかつた。金もやすく取る周兵がすっかり引き受けて了つたら、ほかの時計屋の商ばいはあがつてしまふかも、分らない。そんなことで、仁義のみちをこはしたくなかつたのだ。それでなくとも、近隣では、ラジオがいたんだとか、電燈が點かないとかいつて周兵にたのんで来るが、その度に、かれはそれらのちよつとした直しをして遣つてゐるのが評判になり、まるで直し屋のやうに、恐れ入りますがちつと見ていただけでないでせうか、と、持ち込まれどほしだつた。かれはそのたびに、べつに氣取るとか恩に著せるとかしないで、ハイハイと言つて素直に修繕をして遣つてゐた。地づきの者でないからさうしなげなければならないのであらうが、東京から來た男でこんなに信用のある男はなかつた。

この三千五百尺の頂にある山中の町は、その裏側にまはると、表町は地づきの者で固められてゐても、裏町はさまざまよその國の人が入りみだれ、終戦以後も動かぬ東京落ちの者が裏側に借間や借家をして住んでゐた。中國人も居れば白系露人の間借者もゐて、輕井澤があらゆる人種をあつめてゐるやうに、裏町もその餘りの人びとを盛つてゐて、よその町に見られぬ喧騒と混亂とがうまく調和されて、思ひがけぬ中國の娘のきめのこまかい顔が、二階から往來を眺めてゐる風景もあれば、白系露人の大工さんが鋸をかけてゐる光景もあつた。勿論、此處に落ちて來る疎開人や焼けた氣の毒な人びとは、それぞれの妻の里とか友人とかの縁引を手頼つて來てゐるのだが、永く土地に居づくには極寒の冬越しの艱難から、大てい二三年で見切りをつけて土地を立つてゐた。土地に生れた者さへ隙があれば南方に移住したがるから、その東京落ちをした者には、よくよく辛抱強くこらへてくらさなければ氷點下二十度の冬を越すことは出来なかつた。だから二度冬を越した者は三度目の冬には、もう土地を立つてゐた。生産地でない土地には米もトマトも作れなかつたし、

實りものは杏も梅も、林檎や梨もならない、やつと、胡桃と栗がなるくらゐだった。だから、どれだけの疎開人や東京落ちをした人びとが、荷物をといて、またそれを纏めて立つて行つたか分らない。人は入れ變り、立ちかはつて昨日話した人も、もう、町にゐなくなるといふことは毎度のことであつた。土地の人は出這入りの激しい人づきあひに、少しも氣持のみだれを見せずには落ちついて、よその町や東京落ちの人びとにも、いやな顔を見せずにはゐた。すべてが厳しい冬の寒氣が物を言ひ、立たせる者を立たせてゐたのだ。元來、避暑地である町の人、八月に来て九月五日頃までに歸京する都會人を永い習慣から、それを氣持の上でちよつとさびしく感じるがあつても、町にはそんな小さい感じを反芻してゐてはならない冬の食物の用意があつたから、誰もそんなさびしさなどは感じなかつた。西の方から來てお産をする若い女もいたはつて遣れば、襦袢一枚といふ扮装やぶらで汽車から降りた風來の男も、翌日から薪割りとか、道路なほしとかの仕事をつり付けられ、氷らない季節なら何時でもはたらくことが出來たのである。こんな簡単に仕事の見付かる處は、

何處をさがしても日本中に見當らないであらう、町の人には外來者にたいして人見知りをしなかつた。町には澤山の仕事があつたからだ。その代りはたらかなければ自然に食ひ詰めて土地を立つて行かなければならなかつた。町の人にはだまつて停めようともしなければ、また、あらたに迎へることに苦情はいはなかつた。何事も落著いてじりじりと迫る冬を相手に永年暮した人びとは、何事にも、あさはかな結論を加へずに、すべてがなりゆきのままに委せてゐた。ここに集まる氣骨のある一見面白さうな人物も、もとは東京ではなやかで羽振りのいい生活者だった。はりまやの周兵や、氣慨のある鈴かけや、篆刻師の川島やその娘、マッサージ業者の近江屋に至つては、すみに置けない正義派であつた。たまたま浮浪人のやうに見える源げんとそ
の女も叩けば善良な男女かも知れないのだ。かれらは均しく町の寛大さに悠くりと、ともかくも落著かうとする人々だったのだ。たとへばお鳥と源とについては、かれらがはじめはあかの他人も他人の、まるでちよつとした話すら交はしたことの無い人達だったのである。それはおなじ列車に乗り合つたといふことはあつたけれど、

混んだ列車のなかではお鳥といふ女がゐたことすら、源は知らなかつたし、お鳥も人と人にはさまれたきりで、勿論、源といふ男なぞを知ることにはなかつた。かれらは、五時間半立ちつくして、やつと輕井澤驛に下りたときにおなじ乗客で下りた者は三人しかゐなかつたのであるから、全くかれらはお互の顔すらまじまじと見まもる暇さへなく、町への街道に出なければならなかつた。お鳥もちらと男の顔は偷み見たにちがひなからうが、午後十一時の星ぞらでは男がどういふ顔立をしてゐるかが、よく分るものではない、男の方は男の勘でお鳥がどの程度の容貌をしてゐるかは、恐らく素早く見取つたであらうが、それとも、どの程度で見取つたかも分るものではないのだ。ともかく、お鳥が汽車から降りたときに、源も下りの最終のくるまから下りた。宿命はどんないたづらをするものかも分らない、おなじ汽車に横關周兵も墓地の権利を賣つて、乗りあはせてゐた。お鳥は愛宕山下の五〇何番かの、古い代議士の別荘番の山下といふのをたづねる筈であつたが、五〇何番は周兵の家から三丁となかつた。愛宕山の下には古い別荘が多いし、別荘番といふものは、町

から隔れた自作農のやうな暮らしをしてゐて、周兵は心當りがあるやうな氣がして、連れて行つて上げようといつたのだ。お鳥は淺草の寺に身を寄せ、下寺の女中をしてゐるだが、そこも焼かれ、横濱の叔母の家も、その家人も跡方なかつたから、一先、信州の叔父の家にゆくために來たのだが、別荘番であるとは知らなかつた。非常に複雑な血すちの話はどれだけ信じていいか分らなかつたが、周兵はべつに熱心に問ねて見ようとは思はなかつたのは、も一人の下車した男も連れだつたから、迂濶なことは問ねられなかつた。連れの男は友達が或る植木職人のゐる部屋にゐるから、ふいに思ひ立つてその人を探ねて來たのだといつたが、はたらく處があつたらはたらきたい、何しろ初めての土地で見當がつき兼ねるが、すぐ働けるらしいから降りたいのだといつた。干鰯、旱布、鯨といふやうな闇賣りですごい金をまうけたこともあるが、それも土地に居づいてはたらきながら、もう一度千葉や静岡の方から荷を取つて捌いて見たいといひ、その折は今日のご縁に一口乗つていただいて、と彼はいつて資金や手蔓はみな自分で遣るから、あなたはご近所に少しでも捌いていただ

けばいい、決して迷惑などはおかけしないとふにあつた。そんな好適な商ばいがおあんなさるのなら、販路の広い東京に何故踏停まらなかつたのだといふと、そこに、ぐれた難問題もあつてしばらく足を抜いて、田舎に落ちて来たのだと男はすらすらといつた。餘寒のきびしい最終列車の驛から町まで、二十七八分かつたから女の人は咳入つて、何度もなんてお寒いんでせうといひ、男は、これぢや、此方はまるで冬も同じだと、首をちぢめた。

道すぢに植木屋部屋といふ家の軒先を通つたが、男はその葺戸を叩きながら、何度も周兵に禮をいひ明日にでもお禮にゆくといつたが、周兵はまあ落著いて仕事を見付けなさいといつた。女は道づれがもう尋ねる家を見付けたので、挨拶がはりに女らしくまあようございましてわねといひ、男もあがつたやうな言葉つきで、これもお縁です、いづれお目にかかりませうと、ていねいな語調であつた。葺戸を叩く音をうしろにして、周兵と女は愛宕山の五百何番を心覚えのルカ病院の前から、やや登りになる道を行つた。雪はないが砂礫は氷つてがちがちだつた。

古い代議士の別荘が見付かり、裏手に廻ると、本家の餘材で建てたらしい小屋がけの家といへさうもない丸太がけの、すぐ入口に山下といふ標札がでてゐた。くぐり戸はすぐがらんと開いたが、人が住んでゐないらしい埃臭い匂ひと、一しほの寒さがつんと鼻を刺戟して来た。

「これは空屋ですね。」

「まあ。」

女は中にはいつていき、周兵の擦つた燐寸の明りで目に入れたものは、疊も剥いである相當永い間空家になつてゐる物寂びた光景だつた。床板も處々剥いてあつて恐らく去年の秋あたりから、人が住んでゐない、冬ぢゆう閉め切つてあつたらしかつた。

「こいつは困つた。」

女はどうしたらいいか、餘りの事に前後の考へもうかんで来ないらしく、来なければ宜かつた、といひ、手紙は出して置いてあつたけれども、それも空屋ではとど

きやうもございませんわねといった。

「では私の家にいらつしやい、一泊してゆつくり明日尋ねなさるがいい。」

周兵はすぐ腹をきめ、女もさうするより外にとる手だてもなかつたので、こんなにご迷惑をおかけして済みませんと何度もいつた。かれが元の道に出たとき、先の方から急いでこんな夜中にやつて来る者がゐた。それは先刻の源といふ男だつた。かれは息せき切つてゐたが、女がまだ周兵と連れ立つてゐるのに、驚いていつた。

「お宅が見付からなかつたのですか。」

「ええ。」

女は一しほ悄氣たふうだつた。

「引越したあとらしいんです。お氣の毒とも何ともはや。」

周兵の人のよい返事は男にも快好く聞えた。

「何だか氣懸りで一緒に探して上げようと思つて遣つて來たんです。私の方ほうまく友達にあひましてね。」

「それはよかつた。」

「蟲が知らせるといふんでせうか、友達にはなして見たんですが來て宜かつた。」
源といふ男はすつと女に近づいてゐる感じで、周兵はかれらが先刻から話合つてゐるやうな妙なそらぞらしい感を受取つた。

「何なら友達の家にあいてゐる部屋もあるからお泊りになつたらどうです。」

「いいえ、あの。」

女は返事を躓づかせた。

「實は私のところにお泊りになるやうにいつたんですが何なら孰方でもいいんだ。」
周兵は女がどういふのか、女の方できめてほしかつた。まさかふりのこの男の方に泊るといふことは、さつきからの氣持から女として言ひ出す筈がなかつた。

「じつは此方様でお泊めくださると仰有つていただきましたものですから。」

「それでは明日にでも尋ねて來て下さい、廣見源といへば判ります。」

「は、どうもお寒いのにわざわざいらしつていただいて。」

「では。」

男は周兵に挨拶をすると、あつさりともとの往來に出て行つた。

「東京に歸るお心算ですか。」

「え、もうそれより外に仕やうもございません。」

街燈のあかりで眼にとまつた女は、くせのない素顔がよいたちの顔付だつた。それをさう見たとき先刻の男の方に行かなかつた女のもつこまかい人情が、ひとの善い周兵にはいい氣分のものがあつた。

さだ代と三人炬燵をかこんでやすんだが、さだ代は女の身のまはりを作つて遣り、朝飯はとり分け賑やかだつた。そして周兵は、女の器量のどこかに、東京者のきれのよさがあることに氣づいた。晝すぎ彼女は組長と管理人の家を尋ねて聞いて見たが、山下といふ人は諏訪の町に去年の秋に出向いたきり歸らないといひ、小屋は代議士の所有だつたので、山下と關係がないといふことが分つた。そして女はきのふの廣見さんをたづねて見て、野澤の方の別荘に女中の口があつて食べてこれこれだ

といひ、當分其處にゐづいて諏訪の方に手紙を出して見て、身の振り方をつけるといふのであつた。それだけ聞けば周兵の考へをはなしする必要もなく、女が持金なぞもなく困り抜いて、此の土地にながれて來た者であることも察せられたのだ。周兵はせめて二三日此方に泊つて振り方をつけてもよかつたのだといつたが、女はむしろ快活げにそこそこの挨拶をのこして去つたあと、少時、仕事臺に對つてゐても、すぐには仕事の指先がすすまなかつた。周兵はゆふべからけふの晝までが、幾日間もかかつた永い出來事のやうな氣がした。

周兵は植木部屋のなにはやに、源らしい男がゐるかどうかに注意して、通りがかりにも家の中を見通して見たが、さだ代の聞いて來たところでも、源らしい男はつひぞ見かけないといつた。野澤の方の別荘に勤めに出掛けた女も、勿論その後訪ねても來なければ消息が分らなかつた。餘寒もよほど薄らいだ或日、突然にリュックを背負つた男が周兵をたづねて來たが、さだ代はつひぞ見たことのない男だといひ、裏に廻ると、夜目にもたしかに覺えのある、いつかの廣見源であつた。かれは周兵

を見ると、狎々しくあの晩からずつとつき合つてゐるやうな、頓づきのない言葉つきでリョクを土間に下ろしながらいった。

「お話ししてゐた干鰯を背負つて來ました、ゆふべ千葉を立つて今朝着いたのです
が。」

「鰯とは稀らしいね。」

周兵は源の手で取り出される鰯を見て、山中の町では、ちよつと手にはいりがた
い、びかびかする鱗の光をなつかしげに見入つた。二年振りだつた。かれはべつに
一本の鰯の干物をつまみ出すと、濱値で、すでに五十圓するといつた。

「鰯が五十圓するとは世の中も恐ろしくなつたものだ、鰯は幾らです。」

鰯は七匹十圓だつた。鰯はなまなら安い、干物となると値が張るといつた。

「部屋ぢゆうの者にも分けたんですが、もうこれしか残つてゐないんです。ぞく
ぞくするくらゐ賣れますよ。」

源は財布に金をいれるときに、夥しい札束がくるくる巻いてゐる下側に、なぜか、

周兵から受取つた金を入れた。下側にいやらしい百圓札のインキが冴えた裏側を見
せてゐた。源はもつと置きたいのであるが、約束を履まねばならない家がほかに二
軒ばかりあるといつた。

「何時かの女の人はやはり野澤の方に勤めてゐるんですか。」

周兵はあの晩以來の事に觸れない源に、何氣なく普通の氣持でいつた。

「あれですか、じつは、あれは。」

源は頭をかいて赤くなつて、顔を反らせるやうにした。

「じつは、あれが縁で眞面目に働いてゐるらしいんですが、いや、ご挨拶にもあ
がりたいた言ひながらその日暮しで失禮しました。」

「この町に世帯を持つてゐるんですか。」

周兵は何かぞつとした。そして曖昧な源に、突き込んで世帯のことをつい訊ねた。

「野澤の或る別荘の留守番にはいり込んでゐるんですが、どうも家がなかなか空
いてゐないものですから。」

要領のよい源はもうリキクの紐を肩に通して、さつさと引き上げる用意をした。何時かの晩も、あつさり引き上げて行つたが、この男のかういふ身上が女を惹きつけたのかも知れなかつた。

「では荷が這入りましたらまた上ります。」

言葉のていねいな源は、もう、表通りに出て行つた。女も女なら、男もただの男ではなかつた。少しのぼろも出さずに流れこんだ二人が一緒になつたことも、ありふれた事であり、そして滅多にないことかも分らなかつた。しかも町から隔れた野澤の方では、人眼もすくない。冬ざれの深く凍みこんだあたりでは、町の人に氣付かれることも稀で、周兵の眼にはいらなかつたことも、處を得てゐる證據だつた。

二

春になつて裏横丁に、些んの一時間くらゐのあひだに一家族が越して來たが、周兵の家とは背中あはせの勝手口は垣もない顔をつきあはせるほどの、近くであつた。

髭のある柔和な顔つきの男で、女の子が二人ゐるきりお内儀さんらしい聲も、たうとうその日はしなかつた。荷物らしい搬びの音もなく、また、荷物をとく金槌の音もしない、しんとした引越しであつた。焼けて東京落ちをして來た者にちがひはないが、翌日、さだ代が仕事場に來てちよつと裏隣を見てごらんさいといひ、周兵は裏戸から見たが、六つに十四くらゐの少女が二人で、大人物の浴衣のやうなものを洗濯してゐるほか、變つたものも見られなかつた。さだ代がたい何を見ろといふのか、分らなかつた。

「女の子がどうかしたか。」

「わからない人ね、顔をよく見るのよ。」

周兵は十四くらゐの女の子の顔を見てから、妹のはうをていねいに見入つた。睫毛がくろぐろとおほうた眼の美しいのに驚いた周兵には、兩方の頬の整うた恰好なぞは眼にとまらなかつた。汚ない盲縞のポロモンベから、二人ともはだかの膝頭をまんまるく剥き出しにあらはしてゐた。

晝すぎに髭のある裏の男が挨拶に来て、この土地ははじめてであるが、子供對手にくらしてゐるので煩さいこともおありでせうがといひ、實は家内の姉にあたる家があつたので、来て見るとそれは先年土地を立つたと聞き、やつとお宅の裏の二間きりの家に落ちついたのも、鈴かけさんのお世話になつたのだと言つた。鈴かけさんは周兵が頭髪を刈つてもらふ、店をしてゐない理髪屋さんであつた。頼まれれば刈るが、へいぜいは理髪業などは、そつくりわすれてゐたかつた。あんな氣のつまる商ばいは店を開くだけでも、頭がくさるといつて、人からすすめられても店は出さなかつた。氣に入つた人だけに髪は刈つて遣るといつた。何處か江戸前な、卷舌の人だつた。

「篆刻師といつてもはんこばかりではなく、簾椅子も編んでゐたんですが、編物なら簾でもあみます。」

言葉も柔らかい和々しい男は、川島といふのであつた。日が経つてから、川島は自分で火を起して煮焚きをし、例の十四の女の子が手つたふだけで、お内儀さんらしい者はゐないことが分つた。お内儀さんがゐたら、相當の器量のある人にちがひない、すくなくとも女の子の器量からおしはかつて、並以上であることは、誰にも、女の子の眼を見ただけで判つた。さういふことが周兵に好意をおこさせ、そのうへさだ代は姉妹が餘り見すばらしい恰好をしてゐるので、自分の著古しをモンベに仕立直して著せたが、姉にすれば妹にもして遣らなければならなかつた。二人が来てきちんと坐つて著物のお禮をいつたが、ボロを著てゐるせゐもあらうが、顔だけがあかるくご光がさしてゐるやうで、周兵はいまさらのやうに女の内でも美人といふものは、子供のときから美しいものだと言つた。お禮がはりに持つて來た一つの籠はふちだけを籐でかがり、底もへりも同じ廣さの胡瓜でも入れるに、頃あひのこまかい手のこんだ編み方だつた。もひとつは、洗ひ米を切るに都合のよい、長めのある籠で、編み目のこまかさは隙間のすきを見せない細かい、あざやかなくるひのない編み方であつた。

さすがの周兵の器用な指先も、籠だけは編めないらしがつた。そしてかれのして

出来ないことは、籠を編むことと、織物を織ることの二つだといった。何だつて出来るがこれ二つは出来なかつた。川鳥さんの指先はまるで機械のやうに正確に動くんだね、と、周兵は感心していった。

篆刻師の川鳥は何でもしますからといふ觸れ込みばかりでなく、實際、何でも手傳ひ仕事を遣つてゐた。春は何處でも馬鈴薯の植付に忙しく、三尺の土地にすら馬鈴薯を植ゑつけてゐた。周兵の家でもさうだが一軒先のマッサージやさんの家でも、驛近くの開墾地を借り入れて、肥料は大塚山下から搬んで行つた。ヘルメットを冠つた學校出の若い按摩業者さんはおなじ若い妻のみき子にあと押しをさせて、停車場近くに出掛けたが、客すぢから迎へが來ても、仕事どころぢやない、いま馬鈴薯の植付を逸らしてしまつたら、寒い冬に干上つてしまはなければならぬといつて斷り、がらから車を引いて行つた。その後から篆刻師屋さんが蹠をかついで蹤いて行つたが、けふから按摩さんの近江屋に手傳ふ約束をまもるためだつた。五六年前に今はゐない友達と二人で治療仕事をはじめた近江屋も、やはり行雲流水の例に漏

れた譯ではなかつた。心がけの好い、寧ろ學生のやうな肌合ひのかれは闇屋といふものがきらびで闇屋と見れば飛びかかりさうに激怒するのが、かれの潔癖を現はしてゐた。或日、愛宕山の治療先で揉み療治最中に、その家の取付らしい老百姓ともいふやうな男が來て、牛肉の包みをひろげて目方をはかつてゐた。百姓片手の肉の闇屋さんは、昔の計量器を袋から取り出し、別の布片包から肉切庖丁を出したが、もつと驚くべきことは肉をより分けるための塗箸まで用意してから、別に疊んであつた古い油紙を敷いて、疊をよごさない用心を慮つた丁寧さも念入つたものだが、ちやんと計つてしまふと、肉のよこれを拭くための手拭まで大包の中から取り出したのには、あんまさんの近江屋さんも、魂消るといふことばがそのままそつくり用ゐられる位、驚き入つたのであつた。

「な、成程なあ、そこまでお爺さんは牛肉で渡世をしてゐるんですか。」

半分お百姓の肉の闇屋は、近江屋の言葉なぞに耳を藉さないで、七百日、八百日、九百日、一貫目、一貫目と七十匁か、七十匁餘計かかりよる、さう獨り言のやうに

いふと、例の庖丁で七十匁だけ肉の塊から切り取つたあとを、また、ていねいに計り直して見るのであつた。

「一貫二十匁ある、二十匁取れば一貫目になる。」

肉屋さんは絶えず獨り言をいつてゐたが、例の庖丁で餘分の二十匁だけ好く切れるやつですつと切り取つた。それが近江屋にはあまりに賣り汚ない、慾深な肚を隙見したやうでかつとした氣持にならせた。「きたねえ計量器だなあ。」と、近江屋は嘆息のやうにあげつらつたが、老關商は耳でも遠いのか、眼にさへ色をあらはさなかつた。

「では一貫目ございます。」

かれは主人が幾らだといふと先刻とおなじ低い聲の獨り言のやうな調子でいつた。

「三百八十圓に致して置きますが、汽車賃はいただいでございません。」

近江屋はゆうべ町で買つた肉は、二百八十圓であつた。柔らかに莫迦に出来ない、この肉より良くても悪いことはなかつたと、憤然として老關屋をこきおろした。

「そんな高い肉がいまどきあるんですか、餘まりぢやないか。」

問屋さんは依然取り合はうとはしないで、さらに驚嘆すべきことは細身の包みをばらばらと轉がすやうに開いて、中から砥石を取り出した。そして肉切庖丁をすつと砥石に當てて、乾ら磨ぎのあざやかな手際を見せてゐた。

「何んだ砥石まで持つて歩いてゐやがる。」

近江屋は此の家の主人の肩を揉みほぐしながら、露骨な挑戦的な皮肉をあびせかけ、それでも、まだ腹いせに足りないのか、再た小酷くかれの正義感を打ち明けた。「ねえお爺さん、そんな年まで關賣りしてゐたかないだらうが、見ちやゐられな

い氣がするよ。」

併し老關屋は一々所持品を元のままの包にをさめながら、なにか獨り合點の肯づきをうめき聲のやうにいつて、少しも取り合はうとしないで落著きはらつてゐた。恐らく何人もこの爺さんに些かも動搖をあたへることが出来ないであらう、金のほかのことでは、びくとも動じない手固さがあつた。

が、老闆屋が金を受け取り、包みを抱へて立ち上つた時であつた。はじめて近江屋の顔を冷たいとも、柔和とも名状することの出来ない静かな衰へた眼でちらと見てから、例の咳やくやうな物憂い聲音でいつた。

「お前さんのやうな手合には物價の高低なぞ分るものかね、二百八十圓の牛肉は元値が病牛だからさう付けられるんだが、わしの牛肉は元の相場からびんと彈ねあがつてゐるんですよ。」

かれはそれだけ云ふと、弱つたやうな足どりで出て行つた。たしかに、あの足はリウマチでなければ、もう、衰へ切つてゐると近江屋は商賣がらさう見取つた。だが、かれは反對に今度は黙つて老闆屋には、答へようとしなかつた。

かれはこれらの話を篆刻師に話しすると、一體この町に這入り込んでゐる闇屋は、どれだけのるか分らない、何とかして闇屋を退治しなければ僕達のやうに、時間的な仕事をしてゐる眞摯な人間の収入では食へて行けないと云つた。

「どんな意味でも、人間は元來みな闇屋の分子を多小に拘らす持つてゐるものだ

よ、闇屋といふものは決して戦争中に発見された商賣ではないさ。」

畑地に著いてから日當りのよい土手に腰をおろした篆刻師の川島が、例の穩かで冷たい、突ッ放したやうな言葉つきで云つた。

「ああいふ肉屋の爺さんを見ると、どやしつてたくなるんだ。落著き拂つた肚の据つた爺さんだつたが、あんな肚のある奴は滅多にゐない。」

鍼醫業者はまた何かぶりぶり云つた。たとへば僕なぞは、朝早くから三人のお客様を治療してゐて、六圓づつ取つて十八圓になるとする、そして午後も何彼と用事が出来てくれば、いいところ三人のお客様で打切らなければならぬ。夜はうまくいつて二人といふところだが、それも晝間の疲れがたつて時には一人でご免蒙るんだ、とすれば、うまくいつて八人だが、まあ七人か、六人ぐらゐだ、七人として六七、四十二圓といふ譯になるが、月に五日か六日は休むことになる、打通して寝てつかれをほぐして見るやうな休み日を引くと、月に正味二十三日ぐらゐしか働けない、四十圓として月に八百圓ぐらゐの収入になるけれど、技術とはいへ、マッ

サージも一種の力仕事であり勞働に近いから、食べるものはかつかつでは、とても腕が續かない、按摩もつまり醫者にはちがひないが、醫者よりも勞力がたいへんだから、食べものにかかつてしまつて馬鈴薯の一貫目といふ食糧は、たうてい、夫婦では二日はさきへきれないね、一貫目三十五圓もする馬鈴薯の大半が主食だとすれば、ほかに何も食べないでゐても、一日はたらいたものはその日の夕方にはそつくりお百姓さんの懐中にはいつて、僕はただつかれた手首をさするだけなんだ。何から何まで關だとしても、たまには、さかなの一匹も食べなければならぬ、そのおさかなが何と、どんな切身だつてまづ五圓からはじまつて、二人で十圓がところがあるわけだ、一時間かつきり揉みほぐしてさ、それも手は指の先から足はかがとまできはつた上、つむりは髪の方にまで手をふれての六圓かつきりでは、法華一匹の値だんにも及ばない、少し大きい法華では尾頭つきの六圓はするのだ、僕が按摩の學校を優等で卒業しての仕事一時間のあがり、さかな一匹にも値しないと師匠にいつたら、死んだ頑固な石のやうな師匠なら法華なんか食ふなど、お嘆きになるだらう、

それほど師匠はいい人だつた、いまどきの人間が、眞似をしようとしたつて、眞似のできない眞實なところがあつた。だから、僕は法華といふさかなを見ると、むやみに腹が立つてお膳に向ふと腹いせに、すぐ食べて了ふんだ、だい體、さかなといふものは下は鯛から鯛にいたるまで顔だけは美しいものだが、法華といふやつは馬鹿づらで間が抜けてのつべりとしてゐるやがる、北海道のさかならしい鋭い荒々しいところは少しも見えなくて、紀州か瀬戸内海のさかなのやうににやけたつらをしてゐて、一向有難くないんだ、一體、この法華といふ奴は戦争以前にちつともお目にかからなかつたが、戦争もつまりに詰つたころにのろのろと現はれた、くさみのあつて、どこか厭らしいひもじい面をして、おなじひもじい僕らの前にあらはれたぢやないか、戦争前にはこんなさかなぞ見たことすらなかつたのだ、戦争といふものはさかなまで下等にしてしまふ、妙な作用をもつてゐる一大消費者だから適はない、僕は原則としてよく言ひもするし、さう信じて疑はないのだが、それは「あんまも醫者のうちの一人」といふことなのだ、さういふ言葉はちつとも知らなかつたし考

へもしなかつたが、或る日、師範學校の先生といふ人の處に治療に行つてゐて、先生がふと、「あんまさんもお医者ですからね、つまり普通のお医者達のまなばない學問を敢て修業した人だから、そして普通の醫者が解剖學的に精通してゐることがらをあんまさんはそれほど知らないが、どういふふううに神経や筋肉が急速に病みついてゐるかを發見するのは、あんまさんに俟たなければならぬ病氣だからね、つまり普通の醫者の知らないことをちやんと心得てゐるのはあんまさんの外にはゐないのだから、つまり、あんまさんはあんまさんといふ一般的な通俗的な名前のついた、實力はすつと豊富なお医者なんだ。」僕はかういはれた後では、あんまさんも醫者だといふことに自信が持てて氣丈夫になつたから、僕はつねづね醫者といふものを恐れた。それは鬱然たる醫藥の大家であるから淺學の僕らの及ばないところだと、遺憾ながら悲しくあきらめてゐた。ところがこの土地に来てから池田さんや山上さんの兩博士に、患者先でよくお目にかかることがあつた。兩博士は氣さくない人で、僕が患者の揉み療治に来てゐてもちつとも拘泥はらずに、却つて無

學な僕にちかぢかといはれるのだ。どうぞお關ひなく治療してくさい、僕の診るところではやはりマッサージが利くし、その他の治療は結局むだなことになる、神経痛にはマッサージか入湯かが一般的で、先づ療法としてはいい方だと考へますね、ひとつ、近江やさんに精を出していただくのがどれだけ利目があるか分りませんと仰るんだ。さういふ臨床的なことでは度たびおあひすること、通俗的なあんまといふ名稱のもとではなく、立會ひのお医者なみに扱つてゐられるところから見ても、兩博士の心の廣さも判るし、師範先生のいはゆるあんまさんも醫者の一種といふ意味が判然するんだ。それは博士達の見ないところを見てゐるし、さはずとも分らないところを揉みほぐしてゐる點で、博士達はここまでは自分の領域であり、ある點ではマッサージの療法に據らなければならぬことを明言してゐられた。大抵のあんま（近江やはそのあんまと呼ぶことに、はるかに自他的な「あんま」の内容の異つてゐる點を區別してゐた。）はひよつばこ醫者の前に畏ると雀のやうに震へて坐つてゐた。すこしも矜持といふものも持たなければ自分といふものを忘れて萎縮して

ゐた。あれがいけないのだ、笛を吹いた盲目者の哀しい祖先からの下賤な遠慮を、あたらしいあんま學ををさめたわれわれが今さら持つ必要がない、霜のふる街道をながした歴史のうへの盲目者達のもの語りは、今日ではどこにも残つてゐないし、その長たらしい物語の悲哀を恥ぢることがちつともないのだ。博士達は僕の出先でいはれた、「あなたがゐられるので大いに助かることがありますよ、醫者には按摩術といふものがありませんからね。尤も看護婦にはありますが、あれなどはまるで一種の氣やすめの單なる按摩に過ぎませんからね。」と博士達は立會の醫者に合診されるやうに話されてゐた。

近江やの按摩業者はすつかり春氣づいた日ざしに、暢びりと羽根を伸ばして川島に再び話し續けた。世間では僕がいやなお客様を振るとか氣に入らない人の肩を揉まないなんていふが、それは理髮屋の鈴かけさんのやうに見識を高めてゐるわけではない、ただ、むやみに金さへ出せばいいだらうといふお客様には、むしやくしやして斷つて了ふ、まあ考へてもごらんさい、忙しいからだをして山の下の別荘ま

で二十分もかかつて行くと、いま來客中だからちよつと待つてくれといひ、折角遣つて來たのだからと待ちまうけてゐると、ちよつとどころか、もう、三十分も過ぎてるて來客のかへつて行く氣色がない、あと十分ばかりの我慢だし初めての人だからと、じつところへてゐるうちにたうとう一時間経つて了つた。勿論、お茶も新聞も出してくれない家なのだ、あと十分待たうと、神経痛や中風の患家先の約束の時間がとうに過ぎてゐて、この様子だと歸りの二十分を入れると二時間はかかつてしまへば、けふは二人分あぶれることになる、困つたなあ、と考へ込んでゐるうちに、肝腎の十分間もすんでしまひ、もう我慢ができなくてその家でわけを言つて斷ると、何と言草が小癩に障るなんて、かういふんだ、待たせたお金は二倍分出すから待つてくれとかういふのだ、僕は言つて遣つた、仕事をした分なら頂くが、仕事もしないで金を取るとは商賣がらそんなことは出來ない、さんざ待たせて置いてさ、此方の肚も察しられないやうなお家ならこちらからお斷りだ、そして其處を飛び出して神経痛のお客様のところに行けば、そこも、生憎來客中であつた。くしやくしや

してゐる擧句だからこゝも止さうかと思つたが、この家の主人はこちらのからだか
時間に引つかかつてゐることをよく知つてゐて、來客に、じつはマッサージ屋さん
が來ましたので、ちよいと失禮しますと、あべこべに向様からお察しよくしてくだ
さるのだ、さうなると先刻の家で懲りた矢先ではあり、嬉しくなつて治療するのだ
が、僕が斷わるのもそんな事情があるからだ、一軒で待たされれば順繰りで皆さん
を困らせることになる、一々事情を言つて廻れるものではない、小言を聞くのも、
つらい思ひをするのも此方ばかりなんだ、考へても見たまへ、待たせた時間の二倍
分を拂へばいいといふが、ほかのお得意様がじつと待つていらしつて近江やはまだ
かい、マッサージやさんはまだ來ないかといふ、さういふ聞きなれた聲が耳にきこ
える間じつと、來客のおかへりを今かいまかと待つてゐるじりじりした氣持は、一
體どうしてくれるといひたくなるね、あんまのお得意といふものは、直接肉體にふ
れて仕事にかかつてゐるものだから、その間ぢゆう、お得意の人とはまるで兄弟よ
りも親しくなつてゐるわけだ、誰にもさはれないところを觸つてゐるといふことは

大したことなんだから、そんな人の僕を待つてゐる聲とか状態とかは、商賣拔きの
したい、醫者と患者の間柄よりも明るい氣持のたのしきで繋がつてゐるものだ、
直接、患者のあつたかみを手に感じてその痛いところをほぐして行くのは一種の技
術ではあるが、そのほかに、ふしぎな肉體的に祕密なつながりがある、ちよいと口
にはいへないが、まあ人情のやうなもので少時の間でもそれを感じて仕事をする
といふことは、商賣をはなれた打身な氣持なんだ、よそゆきの、そはそはした何々博
士の來診なぞといふやうな、そんなそらぞらしいものではない。全くあんまといふ
ものは不思議な商賣の一種なんだね、と、近江屋はひどく機嫌よく話しつづけた。
「君は歴平いっけいとしたマッサージといふ仕事があるからいいが、おれなぞは君の畑の
手つだひまでしてゐるくらゐだから、まるで纏つた仕事といふものがない、此間も
頼まれて麥を仕入れに行つたが、君が仕事先で俵たされたと同じい憂目を見たもの
さ、もつと君よりか酷い目にあつた。」

篆刻師川島は松枝在のお百姓に知己があつて、頼まれると馬鈴薯とかメリケン粉

とか、主食とかを仕入れに行くしごとも、こつそりと遣つてゐた。凡て品物で取引
きするのだが、たとへばメリケン粉を一貫目買つてくれば、そのうちの二百目だけ
は川島が日常として貰ひ受けることにし、汽車賃も自分持ちにした。金を取るには
川島はまだ氣恥かしいし、品物の方が執方にしても必要だつたから便利だつた。そ
の日もお百姓家で五升の麥を仕入れて、依頼先に持つて行くと、いま生憎金がない
と来た、麥の元金は自分で支拂つて了つたから、困つた。その家では子供の洋服
があるからそれを持つて行つてくれといひ、子供の服なら、家の子らもあまり酷い
ボロを着てゐるので、金はあるのだが仕方なく、では服を出してくださいと言つた
ものの、取り出した洋服はみんな男用の子供服だつた。家の子は女ばかりだから仕
立直したら、直しにかかる、さういつても先方は男物だし、薄情のやうだが麥はそ
のままリュックに入れて、戻らなければならなかつた。ありつたけの百五十の金は麥
が捌けなければ一日か二日寝かされることになるのだ、それは痛手以上の痛手なん
だ、僅かな金を素早く生かして使はないと、その日ぐらしがすぐ停つてしまふ、鬱

鬱して野澤の往來をもどりかけて来たが、妙な日といふものは、妙なことが重なる
ものですね、雲揚ヶ池近くかかると、一軒の別荘があつてそこに丸太小屋のやうな
建物があつた。大方、別荘番の住ひであらうと見過すと、ここでも馬鈴薯の植付最
中であつた。一人の男が種薯を植ゑてゐたが、通りがかりの私の方に何氣なくふり
向いて見て、私と眼を見合せた。向ふよりも此方が驚いてしまつて、私としては大
聲すぎるくらゐな聲を出した。

「や、源さんはこんな處にしけ込んでゐたのかい。」

源さんと呼ばれた男は、れいの周兵と夜行から下りた源だつた。かれは非常にき
まりの悪い顔を丸太小屋の方に注意して見てから、畑から往來の方に出て来た。

「大變ごぶさたをしてしまひまして。」

「君はどうして此の土地に来たんだ、見れば薯の植付をしたりして大變な落著き
やうぢやないか。」

「つい最近やつて来たんですが、いろいろこれには込み入つた譯がありましたね。」

源は先へ先へと歩くやうにして、早く畑と丸太小屋から離れた處に行きたいらしかつた。川島にもその氣持が分り、かれはわざと立ち停つて見せた。

「君が來なくなつてから間もなく焼けて師匠も亡くなつた。子供をつれて此の土地にながれて來たが、君のやうな落著きはまだまだ出來さうもないよ。」

「お師匠が亡くなつたんです、それは全く初耳です。申譯のしやうもないことになりました。」

源はどこまでも殊勝だつた。正直さうな眞面目一本氣に見せることの身上は、かれの天稟の質らしかつた。

「濟んだことはどうでもいいが、あれは君の住ひかね。」

「ええまあ假住居なんです。」

「久し振りであるのでお茶の一杯も振舞つて貰ふかね。」

源は當惑し切つてゐたが、見切りのいいかれは、このまま川島をかへすことも不可能なことだし、といつて立話もできなかつた。それに、川島のしんねりしたねば

りのある性質を知つてゐる源は、このまま歸る氣のないかれを素早く見取つた。

「ほんとの丸太小屋です。」

澁々畑をよこぎり、板戸を開けるとすぐ爐があつて、ひとりの若い女が山落をゆでながら、古雑誌を膝の上にひろげてゐた。こんな女まで出來てゐたのか、運のいい奴にはかなはないと川島はむしろ無様に皮肉な言葉づかひで言つた。

「奥さんかね。」

「え、此の方は川島さんと仰つて、聖天横丁のお宅でお世話になつてゐたんだ、通りでおあひしたんだ。」

「はじめましてわたくしは鳥と申します家内でございます。」

と、彼女は譯もなく眞赤になり、何度も頭をさげる狼狽振りだつた。

「お茶をいれてね、それから何かあつたら出してくれ。」

「はい。」

源も何かおちつかす自分でお茶筒を出したり、落の鍋を下ろしたりしながら妻の

手つだひをしたが、川島は二人の動きを静かに目に入れながら、世帯道具らしい物がまるでないこの家で、東自慢の瓶詰の空箱が唯一の道具であることを見た。

「しかし町をはなれて二人暮らしには持つて来いの家だね、冬越しもできるらしいぢやないか。」

「壁でも塗りこめばいいんですが。」源は氣づいて、「お師匠には全く何ともお悼みの申しやうもない、此方の奥さんは生花のお師匠をしてゐられたんだよ、それが焼けてお亡くなりになつたんだ、するぶん永い間花を見ていただいたもんだが、全くなあ、まるで知らなかつた。」

源の妻はどういつていいか分らず、口のうちに咳やくやうな低い聲でおくやみの言葉をのべた。下町にゐる植木屋がみなひと通り花をならつてゐるやうに、源も、聖天横丁の家に通つてゐた。篆刻屋とは別の入口ではじめた川島の妻の生花稼業は、相當の弟子もついで、花問屋でも川島屋のものは、晝すぎに遅れて行つても、ちやんと用意してあつた。源は花問屋の間に立ち、仕入れの花をはこんでゐたが、その

うち花の質が悪くなつたばかりではなく、晝過ぎにはもう川島屋の分は用意してなかつた。花が廻らないとおさらひに事缺くことになり、毎日おなじ種類のものでは、生けやうもなかつた。或日、かれの妻はふしぎさうに頭をひねつて、わたくし、ちよいと問屋に廻つて見ますわ、きちんとお拂ひも付け届もしてゐるのに、こんなに悪くあしらはれる譯がないんですもの、と、膝を崩さない妻は生花の師匠らしい、びちびちした言葉つきでさういつた。川島より何枚も上の彼女には、かれは何事もただ委せるほかに、することがなかつた。花問屋に行つた彼女はもう三月以上も拂ひのないこと、源がそれを途中で捲いたことを知つた、と同時に、そのおなじ日の晝すぎに出かけた源は、師匠がひる前に訪ねたことを知り、問屋でさんざん毒づかれてもう川島屋にはもどれず、そのまま聖天横丁をはなれて了つた。眼の不自由な母親一人きりであつたが、それも、行きがかりで川島屋が後始末をし、埼玉の田舎にかへして後ををさめた。それきり源の行衛なぞ誰も知らず、大火後のごたごたと、妻の不慮の死とで、川島屋も二人の娘をつれて土地を立つて了つたのである。例の

周兵があんなみめよい娘を生むくらゐの女なら、大した美人だつたらうにといふ感激を敢てするのも、いはれない事ではなかつた。當時、川島屋のお師匠といへば、色も白く、膝をくづさないでどんな大物でもこなして生ける手ぎはは、相當聞えたものだつた。

川島は茶を喫んでからも、却々動かなかつた。じりじりと迫るやうな川島屋の沈著さが、あまりに思ひがけない不意の出現だつたのか、源はあぶら汗を感じるほど脅やかされる氣持で、何とかして女房を外につれ出す用事がないものかと、そのみを焦つた。女房には懸て切り出すであらうと思はれる川島屋の、花間屋の一件は聞かしたくなかつた。寧ろ、此方から先を見越しての幾干かいくせんを思ひきるより外に、穩やかに川島屋を歸す方法が見つからなかつたのだ。

源は土間に出ると、妻にちよいと呼んで何かさゝやいたが、妻のお鳥は思ひの外、軽い返事をして、それではちよいと行つて來るといつた。

「ごゆつくりなさいませ。」

彼女はかういふと、小屋の外に出て行つた。履物の音の途絶えたところを聞き澄して、源はそれでも不安なのか、小屋の外まで出て行つて彼女の背後姿を見さだめて戻つた。

「あれには何も聞かしたくないものですから。」

源はさういふと例の瓶詰の空箱から、女持の財布と、自分の紙入との分を合した紙幣を二つ折にして、川島屋の前に置いて、どこか、芝居じみた氣障な語調になつていつた。

「これだけではお師匠にも合す顔がないんですけど、これはわたしの謝罪の印ですからをさめて戴きたいのです。おなじ町に住んでゐるんですから、後はまた後で辨償することにいたしますから。」

「お金を取りに來た譯ではないが、折角何だからいただいで置かう、師匠も君の供物はよろこんで受取つてくれるだらう。」

川島は源の費消した金高に就ても、幾らになるとは口を切らなかつた。源がかう

いふ氣持になつたのは、よくよくのきまり悪さや、妻の手前もあつても、やはり、どこかに金の餘裕を生じてゐるにちがひない、さうでなかつたら、人間はかうも手ぎは好く切れるものではなかつた。

「後で君は困るやうなことになるか。」

「千葉から鯛や鰯を仕入れて賣り捌いてゐる内職があるもんですから、儲かる時は氣味の悪いほど賣れますよ、お宅の表がはに周兵さんて時計修繕の上手な人がりますね。」

「職人としては立派過ぎる人だが、どうして君はあの方を知つてゐるんだ。」

「あの人と汽車で一緒になつていろいろお世話になつたことがあるんです、それが縁であそこにも鯛を持つて行くんです。」

「いい人だね、家の子供もモンベを作つて貰ふやら、おやつをご馳走になるやらして、たいへんお世話になつてゐる。」

「そんな關係ですから此方の身分だけは仰らないで下さい、といつても、あれほ

どの人だから睨んでゐるところは、ちやんと睨んでゐるでせうがね。」

しかしその列車から下りた一人の女が、何時の間にか自分の妻になつてゐるとも、その夜一泊させてもらったことなどは、さすがの源も喋んではなかつた。それは女房の身がらをせんさくされるやうで、言ひたくなかつたのだ。

篆刻師の川島は先刻から耐へてゐて、いまも言はうかと待ち伏せにしてゐる一言を、たうとう我慢しきれないで、沈んだ澁い聲音でいつた。

「君は先刻からお母さんのことを一言もいはないね。」

「それについてご迷惑をおかけしまして、ちよいと口にいへない苦しい氣持なんです。あの折は全くお世話をおかけしました。」

源は今にも出さうな氣のする最後の問題にふれて來たので、萎縮した眼をしよぼつかせた。つい最初は金に詰つて仕入れの分は費消したものの、二ヶ月後には問屋の方から看破され、若し君が償はなかつたら師匠に知らせると脅かされたが、それを一日延ばしに三ヶ月経つた後では、生優しい金高ではなかつた。たうてい、蔽ひ

隠せるものではない、源は肚を決め、師匠の家から足を抜くより外にとる手立もなかつた。機敏な師匠はそれを見抜いて源の裏を掻いたのだが、そこまで言ひ捲くられることはあるまい、だが、川島のしんねりした調子が、どう突き込んでくるか判らなかつた。

「君の處に便でもあつたのかね。」

「此方に來る前に埼玉の方に寄つて母の手當をしてきたのですが、母は、あなたに助けられなかつたら、今頃どうなつてゐるか分らないと言つてゐました。」

「手當をして旅に出たのはいいね、儲かつたら金でも送つて置くがいいな、私の方などはどうでもいいから。」

「それは充分心得てゐる心算です。」

川島は折を見て立ち上つた。例のリュックを手にとると肩にかけたが、源は背後からそれを手つたつた。

「だいぶ長くお邪魔をしたね、おちついていい暮しをしたまへ。」

「ありがとうございます。お目にかかつて肩の荷が下りたやうな氣がしますよ、寢ざめが悪くてどうお詫びしようかと、しよつちゆう考へ込んでゐたんです。」

「ではまた。」

川島はけふの不首尾な麥五升の重たい始末が、さつきからの悠然たる落著いた應對振りとは反對に、變つた自分の依頼された買出しのはぐれに打つからざるをえなかつた。丸太小屋を出ると往來を真直ぐに町の方に歩き出したが、かくしには源から受取つた金が恐らく二百近くあるらしいのも、けふのはぐれを補へば足る金だつた。嘗て自分の金をただ使ひにした源の金で、けふのなくてはならない急場の穴をふさぐことの出來たのも、まがりみちをして著いた金といふものの、遠くて近い道のりの數奇さを思つた。

近江屋は川島の身分をはじめて知つて、かれの生やした罷もけふは何か由緒ありげに見え、自分の畑などに依頼できる人物でないことを知つたが、その半面にかういふ人にも頼める金の窮屈な時勢に、現金渡世の出來る腕をちよつと快よく回顧

した。

「あなたでも鈴かけさんでも、元を正せばみな歴乎とした人だ。人間はどんなに窮迫してゐても、みがけば良ければ良いで元の生活の生地が出て來ますからね。」

川島も近江屋とやらんで、薯の植付をはじめた。二百坪もある畑の植付は悉く冬の周到な用意のもとに耕されてゐた。二百坪に對する荒地の耕作は、都合十人かかつて二百五十圓支拂ひ、土ふるひや肥料に五人使つて二百五十圓かかり、お八つや煙草をかけると六百圓になつたが、かれはそこに十貫の芋を植ゑつけて、十倍の百貫目とり入れるつもりだつた。一貫二十五圓と先々を見越しての百貫は時價二千五百圓になるが、川島屋と、ほかに一人を三日つかつての賃金をさし引いても、千八百圓の馬鈴薯をとり入れる豫定になつてゐた。妻の里に五俵分けても、あとは冬越しに充分の食糧になる見込みだつた。若し雨や蟲や野荒しがあつても、信州の種薯は、上州に持つて行けば高原寒地の種薯ゆゑ、たいてい五貫目背負つて行つてその倍高の十貫と取りかへることが出来るのであつた。かれは軍師のやうな計畫を立て

て、生活といふものはつねづね二段三段の構へがなくては、外れや邪魔がはいつてくる用意をしてゐなくては、ならないと言ふのであつた。

三

「近江やも、蕎麥まで蒔いたな。」

停車場近くの近江屋の借畑に、もう蕎麥の花が氣はひしてゐるのに、波を打たせて風は秋めいて吹いた。いま著いたばかりの下りの乗客のなかに、小さい美しい顔が一つ雜つて、それがおどおどと急ぎ足で驛の外に出ようとしてゐた。

「どうした、お休みを貰つたの。」

周兵は、川島屋の上の娘の、十四になるあい子に聲をかけた。不斷著のままの手には荷物らしいものは、手拭一本さげてゐなかつた。川島に麥粉や米を分けてくれる松枝在の百姓が、手が足りないから年はいかなくてもいいから、あい子をかしてくれぬかと言ひ、川島は商賣の關係からあい子を手傳ひに遣つてゐたのだ。

「逃げて来たの。」

「ええ。」

と、あい子はうまく言ひ當てられ、泣きさうな惜えたかほつきをした。そして汽車の方を振り向いて見れば、追駈けられてゐはしないかと懸念してゐた。

「勤めが酷かつたのかね。」

「いいえ。」

「食物がなかつたの。」

「ちがふわ。」

「それちや逃げ出した譯が分らないぢやないか。」

周兵はかういふ美貌の子が手つたひかたはら、百姓家にゐて逃げ出すことに或ることに思ひついて、寒くなつた。

「さあ、をちさんと一緒なら追つて来たつて大丈夫だよ、飛んだ目にあつたね。」

周兵は、驛の前通りを町の方に歩いた。あい子はだまつて周兵に食つ付くやうに

し、かれは彼女の黒いふさふさしてゐる髪をみると、取引先とはいへ川島屋もうっかりして勤めに出したものに思へた。

「その家は大きな百姓かい。」

「いいえ、ちひちやい百姓。」

「子供はゐないの。」

「ゐない。」

周兵は唇を噛んだ。

川島屋は外出して家にゐなかつた。あい子は妹をつかまへると、急にお喋りになつて話し出した。

その日、鈴かけが仕事かへりの小さいバスケットに理髪道具を入れて、周兵の家に立ち寄つた。かれは桔梗にわれもかうの束を持ち、出先の原で摘んだのだといつたが、花でも部屋に生けて置かなかつたら何も見る物がないといつた。冬ぢゆう、東京から沈丁花を持つて来て生けたりしてゐた鈴かけは、俳句も作るし一とほりの

趣味は解してゐた。或る屋敷でかれは青磁の硯屏を見、竹彫の筆筒の美事な中國のものを見て嬉しがつた。君はとこやさんなのに、よく硯屏のことを知つてゐるねといはれて、鈴かけは硯屏くらゐ誰だつて知つてゐらあ、とこやなんてひと口にいはれることのいやさに、かれはそのつぎから迎へが來ても行かなかつた。周兵のいひ草ではないが、鈴かけの淺草の店は十何人かの職人をつかひ、四面の鏡を前にした彼は、いかにも潔癖らしい、痲性の好みから職人の仕事振りを一旦見遣りながら、これだけは何時も我慢ならないと見え、低い鋭い聲でそつと耳もとで囁いて云つた。

「オイ、はな毛はちやんと摘んで置くんだけせ。」

職人でそれが不衛生だといつて聞かない者がゐると、かれは頑としてそれを左うかとは言はなかつた。

「おれの店にゐるあひだは皆さんのはな毛はつんで上げるんだ。それが氣にいらなきや縁がないのだ。」

かれは職人がそれをしないと、自分で光つた鋏を持つて立つた。生粹の江戸つ子

であるかれの店の用具は、よく消毒されてゐて清潔であつた。かれの道樂は十日めごとにかへる借り植木鉢も、大振りな檜葉、松、もみぢ、銀杏といふやうな澁好み、幹のあるものを店に入れさせ、普通の人が粗末にする筈のものに朝早く店のひらく前に、自分で如露の水を噴いてやつて雜閨街のゆうべの塵と埃をあらひそいでゐた。かうしてやらなければ、仕事も手につかないと毎時も言つてゐた。だから植木溜でも、鈴かけは木を大切にしてくれるからといひ、幹物の太い、松なぞの枝に苦のあるものが搬ばれた。鈴かけはそれをよろこんで仕事にあひまに、煙霞山容の氣はひを忍ぶがやうであつた。或る年の夏もそろそろ終らうとする、暑いが頭の爽ばりする早い朝のことだつた、鈴かけは店に出て窓かけを引かうとして、なにやら白い羽根のやうなものを植木の松の枝のあひに見て、よく氣をつけてのぞくと、それは夜明けごろに殻からうまれたばかりのにいに蟬だつた。羽根はまだ白菜のやうな乳白色をしてゐて、頭部にある金のやうな粉も眞新しく、やつと粘土のやうな色がついたばかりの胴と腹の間には、枝の裏からすかして見れば鳴く雄蟬らしく、

二枚の鱗がたの震鳴盤が用意されてあつた。大へんなものが生れて出て来たぞ、とよく見ると松の幹に殻が一つ、それも背中が割れてゐて、割れ目がまだ自然にすばからぬ程、ほんの一時間くらゐ前に出たものらしかつた。一體、何處から這ひ出たものだらうと、植木鉢の土をあらためると松の根元に、子供のをりよく見つけたことのある懐かしい蟬の穴がうがたれてゐて、そこから、這ひ出たものらしかつた。蟬は相當土中では深い處にゐるものだが、きつと松の根元に土を寄せたときからゐたものかも知れない、松はひと握りではにぎりきれない太い幹のものだが、三十年くらの経つてゐるであらう、鈴かけはにこにこしながら、職人達が店にそれぞれに現はれると、静かにしろ障つてはいかんとさういつて、障らせなかつた。

「淺草の眞中の店にゐてさ、蟬の誕生を見るなんてこいつあ全く誰も本統とは思ふまい。」

かれは夕方まで眼まぐるしい位、蟬を見に植木鉢のそばに行つたが、職人達も、客もみな蟬を珍らしがつた。夕方までにはすつかり粘土色に黒いつやが出て、羽根

は澁を刷いたやうな變色した反りを見せて来た。鈴かけは今夜このままにして置いた方がいいか、それとも公園の立木に止らせて明日あたり何處かへ飛ばせたらいいかに、だいぶ、永いあひだ頭をつかつた。折角のものを惜しいといふ氣込みから、放す氣にもならなかつた。といつてこんな狭い店の間に置いてゐても、飼ふことも食物をやることも知らなかつた。たうとう諦らめて態々公園まで出かけ、人目のつかない青木の葉うらにばたばたするのをやつと、じつと止らせ、止らせて置いてしばらく地面の上に落ちはしないかを見さだめてから、機嫌の好い鈴かけは仲店に出て新刊書を二冊に俳句集も加へて購つてもどつた。

かれはその後ひまきへあれば、松の根元を覗いてゐた。植木溜から取り代へに来ても、いましばらく置いてくれといつて渡さなかつた。たしか四日目か五日目に残暑の照りが店の間にさしこむ晝すぎに、一疋の蟬が往來の家と家の間をどこに止らうかと、宙戸惑ひをしたあげく、鈴かけの店のかゝてんに止るが早いのか、じいいと性急になが鳴聲をあげた。

「ほう、たうとうお禮に遣つて来たか。」

はりまやの鈴かけは表通りに飛び出して、かーてんの上の端で鳴く蟬をよろこばしげに、縁ふかきものごとく見上げた。蟬は鳴くほど鳴くとそれきり再び先刻のやうに往來で宙戸惑ひをして、こんどは、すつと高い空づたひに見えがくれして飛んで行つた。蟬も生れたところは忘れちやゐない、ああして遣つて来るから可愛いぢやないか、と、別の蟬であるにせよ、ないにせよ、そして凡てが偶然であつてもなくても鈴かけはあの年ほどよく働いて嬉しかつた年はないと、周兵が感心するほど鈴かけは雄辯に物語つた。

周兵はあなたでも近江屋でも、川島さんでもみんな夏ちゆう馬鈴薯を作つてゐられたが、私は暇もなく作り方も知らなかつたのでたうとう一粒も馬鈴薯は作らなかつた。薯を作らない人間はここでは冬越しは出来ない、それに時計修繕の仕事も、是非上京して手傳つてくれといふ人があり、店も共同でやり目抜き銀座はづれに、もう店飾の用意ができたから來いといふので、かういふ山間にくすぶつて何時まで

もゐられるものでないから、いづれ上京するなら早い方がいいと思ふので、もう腹は決めて此頃では直しも取らないやうにしてゐると、周兵はこの山驛を立つ内輪話を打明けて言つた。

「あなたも立つのか。」

鈴かけは突然の話に、かれ自身居残る永い冬の所在なきに、さびしい町の景色を眼にちらつかせた。

「私も友達や組合から、君が田舎にゐて貰つては困る、淺草の仲間を見殺しにする氣かと言はれるごとに、自分ばかりのうのうしてゐるやうな居た耐らない氣がしてゐるんです、まだ決めてゐる譯ではないが、いづれは立たなければならぬやうに出來てゐるんですがね。」

鈴かけは田舎でくさるくさらんは問題ではないが、義理堅い昔の友達からの手紙を見ると、もう一度バツク住ひでもいいから、威勢のよい店さばきで朝日のちらつくなかで、隣近所の挨拶をして見たいと云つた。

「私共のやうな相当年を食つた人間の眼つきが、倒れかかつた大きな屋臺にはいるのぢやないかね、何も眼をぎらつかせなくともいいが、じつと見てゐるといふことも、おろそかに出来ないことぢやないんですか。」

周兵のこの言葉の含蓄は、よく鈴かけにわかるやうな気がした。

「あなたも歸る肚がおあんなさるなら、乗氣になるな、此處で苦勞したことも、むだでなくなる譯だ。」

「出直すとしますかね。」

鈴かけは此間も、川島屋が大きい方の、ほら別嬪の娘さんの方に大きい荷物をかつかせ、自分も背負ひきれないくらゐのリクモをかついで行くのに、停車場の通りで出會つた、大變大きい荷物だが、一體何だといふと、例の人の善い笑ひ顔をして見せたが、川島さんはなかないはない、娘もにこついてゐる、これは餘程の物だと、疊みかけて聞くと、川島さんの人のよい顔にきふにきまりの悪い羞かしさうな鼻皺が寄つた。そして川島さんはいつた。

「これは牛の骨ですよ。」

「牛の骨か。」

「榮養はなし娘達も育ちざかりですから、けふはうんと仕入れて來たんです。」

「それはよい物を手に入れましたね。」

「お宅へもお願けしてもいいんです。あい子が二貫目、わたしが三貫目背負つてゐるんです。」

川島さんは秋風も身にしみるうそ寒い日なのに、汗じみた額を手の平でぬぐつた。女房のゐないかれは、何とかして娘達を育てようと焦りに焦つてゐるが、牛の骨の思ひつきは徹底的であつた。

「此方で買へば法外に取られますからね、これでラードも取れるんです。」

川島さんと別れても、何だか榮養はあつても、牛の骨を五貫目背負つて仕入れるといふことが、むやみに悲しかつたと、鈴かけは江戸ッ子には見榮や張りではないが、そこまでの買出しはできなかつた。

周兵は何時かの驛で出會つたあい子のが、後で聞くと、百姓家の主人が用もないのに畑にあい子を連れて行き、あい子は恐くなつて逃げ出した始末を思ひうかべ、いまの川島の話の間にそれがまた彼の妙なところを刺戟して、暗然たるものがあつた。

「東京は何時でも私どもを迎へてくれるからね、ではまた。」

鈴かけはまた秋かぜの吹く町の通りに出た。近江やに寄つて肩でも揉んで貰ひ、あれも此の土地を立つやうにいつてゐたが、鈴かけ自身はすぐに立ちさうな氣振りを見せてやらうと、半ばさびしい巫山戯た氣持を抱いて、うそ寒さに襟元を掻き合せながら急いだ。

近江路

「このたびの使者、秀成まかり色々配慮あるべき節、ただ秘めごとにてのお願ひこれあり、お聞きとどけの程いのりまるませます。外ならず何卒みめよき孰れの姫にても不苦、和歌のころえあらばなほさらめでたく、なきとも咎めあるまじかれど、しかるべき容色かたちすぐれたる姫のぞましく、母としての日頃考へ置き申すことも、右のことより外ならず、かりそめの使でないことも、お含み置きくださいますやう。」この便は、秀成の下向の前に、近江の國司つかさの許にとどけられてゐた。近江らしい湖のひかりの見える、山ざかひの寂びた道で秀成の一行は、足を停めた。誰が指圖するまでもなく、供の者は、次の坂を下つたところに姿を避けて、或る車の外圍ひにいつはりの荷の幕を下げたのが、かたへの櫓ぐらの木のもとに置かれた。みやこからすつとこの方、人氣ない山路にかかると、幕とまりはあげられたが、村里にか

かると人目を避けることになつた。

「もう湖が見える。」

秀成がそばに寄ると、山車のなかから、静か野が手でとばりをささへ、杳も、山車からかいつまんで出たのであつた。背丈は高く、眼はほそみながらも、臉は二重ではない、すぐ臉のうへにまで顔かたちの色が、なごやかにさしてゐた。山路の疲れは、徒歩とくるまの半々であつたから、それほどではなかつた。背丈の高さからやや背にまるみはあつたが、それはこの女人の生れつき淑やかさを、うまく調和してゐるといふ見方がよいやうであつた。彼女はすこしからだを伸すやうにしていつた。

「もう近江にまゐつたのでせうか。」

「この山をくだれば近江ノ國つづきになり申す。かうして立つてゐる處の土も、近江ノ國かも知れぬ。」

かれらは、都を立つときから近江ノ國の山ざかひで、一先づ別れることになつて

ゐた。秀成は狩の使に、そして静か野はかれを送るとふたたび一人でゐなければならぬ館に、山を越えて引きかへすことに、ゆふべ決めたのであつた。

「おわかれのときが参りました。」

「つかれたことであらう。これへ、ここは褥のやうだ。」

「ここまではあなた様をたよつて参りましたものの歸りは心さびしくぞんじます。」

「それは言はぬことぞ。」

「はい。」

「これへ。」

檜と栗とを雜へた立木の真中は、短かい山芝と、乾いた赤土であつた。そのうへに、きちんと坐つた静か野の衣裳と、衣裳をもれる、わづかばかりの襟あしのほかは、照つた顔をのぞいては、ほとんど、まばゆい縫ひのある袴だつた。秀成は、山の土の上に坐つた静か野の、老大な衣裳のなかにある、驚くべきか織いからだを四邊の景色の釣合から、却つてなまなましく感じた。匂ひは匂ひともつれあふ、かぐ

はしいものであつた。

「しばらくのあひだ留守をしてたもれ。」

「此處までお見送りできて嬉しうございます。」

静か野は、用意のあまい甘みの包をひらいて、おのが膝のうへに置いた。秀成は、それをつまんで幾つも食べ、静か野は一つだけ口に入れた。そして、さういふひそか事をしてゐる自分がをかしくなり、低い聲で笑つた。低い聲で笑つてさへ山中にひびくらしく、うとうとと、そんな聲でなく鳥のこゑに似てゐた。

「あれが湖、あの岸べをつたひ、たどり著けば近江の國になる。」

半ばは山の立木で見えないが、片照りの湖は器にもられたものとしか、かすかで見えなかつた。

「館のお掃除も申し、さまさまにいそがしうくらすことでございませう。お成りのないときがすくなうございますゆゑ。」

静か野は、秀成のあらぬ日のしごとと勤めをもの語つたが、さういふ女人はけんらんな今の世の女のなかで、稀らしい淑やかさであつた。けふ相見えると、けふといふ日に、一つの頭にのこることをいふ静か野だつた。明日相見えてもの語れば、べつの哀しい言葉をのこしてくれる人だ、秀成は、それを一つあて覺えて置くには、終日、静か野のことをおもひくらすなければならぬ、そつくりその人のものにならなければならなかつた。愛づるといふことの深さは、どこまで行けば行きつくすのであらうかと、秀成はとらへがたいものを計らうとしながら、いつも果さなかつた。彼は静か野のからだの一部分にそんなときは確かりふれてゐた。そこで、やつと思づけるものがあつた。

ゆふべ、しばらくの別れの土器を交はした折、静か野は話をするのではなく、自分で自分にいひ聞かせるやうにして、うつとりしながらいつた言葉があつた。

「お別れ申さねばならぬ折がございましたら、身を引いてあなた様を軽くしてさしあげます。わたくしそのやうな心になつてお仕へできるのを、嬉しく思はずにゐられませぬ。」

「何をそのやうに申す。」

「いいえ、女といふものが斯様な心になることを、おうけくくださいますやう。」

「だが静か、その言葉の向ふ側が見えて來はせぬか。」

「いまの心さへ續いて行けば、向ふ側でわたくしはあなた様をお苦しめしてはならぬと念じて居ります。」

「今宵はよいことを承つた。」

秀成は美しさの加はる静かを、かい抱いてをつた。

「おわかりになりましたか？」

秀成はうなづいて見せた。かれは一人で立つことができなかつた。何とかして静か野と二人で、人氣のない山路をしつしつとくるまを遣りたかつた。秋立つ山中路をさきに走る斑妙蟲はんめうむしに氣を取られたりして、をりをり、くるまの窓をうち寄せては話して見たかつた。かれは供の者にくるまの荷づけのとばりを掲げさせ、それが何處にでも、随時にあげおろしの出來るやうに命じ、なかには、疲れをささへるもた

れと、白湯と器うつはもしのばせた。供の者の重なるものにも、それが彼女であることを知らしめず、たくみに、驛々の代へ馬どきを外させた。そしてこの事を静か野に打ち明けたとき、彼女は喜ぶであらうとは、思の外だつた。彼女はそれが供の者に知れずに置かないことを憂へたが、秀成は若しそれが誰彼に知れても、苦しくないといつた。

静か野も、さういふ山路のもの語りに、ひめられた景色をさぐるだけでも、行つて見たかつた。

かくて彼らは立つて來たのである。人目を避けた宿舎には、すつとくるまのまま、その奥の正殿まで乗り入れ、そして明けるとふたたび街道へ、正殿からくるまは人の肩ぐるまで、松光る並木の下まではこぼれた。山深くなつたところでは黄葉まじりの林が見え、山淺いところでは日の表はやや暑いくらゐであつた。山ぐるまの窓をおとづれるものには、夕ちかくはいとど、こほろぎの黒障がちな一ときがあり、晝は蜻蛉のもつれとぶ山中道だつた。秀成はそれらの一つひとつに教へをあた

へた。あきつだけでも、おはぐるとんぼ、大馬とんぼ赤とんぼ、鹽からとんぼに
げらふとんぼと云ふやうに、秀成は子供の頃におぼえた名前をおもひ出していつた。
「鳴く蟲はあれは何と申します。」

叢に鳴く蟲は、暑いところだけで鳴いてゐた。秀成は、しかし、その蟲の名は知
らなかつた。かういふ楽しい旅も、近江路にさしかかると、もう、それを繰り返し
て見るには、すでに景色は盡きてゐた。

「お歸りにはお迎へ申し上げたうございます。」

やつと、静か野は先刻から考へてゐたことを、話し出た。

「此處までか。」

「この近江路まででございます。」

「両方から相會ふくるまはそれこそ人眼を聳えさせるではないか、急いでみやこ
に戻るといふ氣持はえもいはれぬ、迎へはない方がいい。」

「はい。」

「お身もみやこ近くなつて燈のはいつた町を遠くで見られるがいい。」

誰でもみやこに入りぎはの、燈のうつくしさを心に覚えぬ者はないが、はじめて
旅に出た静か野はそれを知らなかつた。

「これは何といふ木にございます。」

「檜ヒノと申す。」

「これに覺えをして置くことはかなひませぬか。あなた様の秀様、わたくしの静シヅカ、
それを後の日にしるして置くことはかなひませぬか。」

この申し出には女らしい、かたみを残す好みが出てゐた。しかも、名前だけをき
ざむことには、さしきはりがなかつた。

「身がみづから彫つて見よう。幼少の折せに刻もやつたことがある。」

「お手つだひ申しませうか。」

「それには及ばぬ。静の一字でよいか、それとも、……」

「一文字でたくさんにございます。」

秀成は、小剣をはらふと木のうしろに廻り、人眼に立たぬところの草をはらつた。かれが、小剣のさきで非常な速さで彫りはじめてから、それと同時くらゐにかれはもう小剣を拭いてゐた。皮を一枚めくつた櫓の木には秀といふ文字と静といふ文字が、やや深みある彫りでほられてゐた。

何となく立ち上つた静か野は、その木の前に立つて柔らかに頭を下げた。秀成にはせずさういふ彫文に對してつむりを下げた静か野を、秀成はけふもまた、あたらしい彼女のこまかい行狀のひとつを快よくうつとりと見やつた。恐らくこの櫓の木をわざわざ見に来ることはございますまい、しかし、これを見に来ることがきつとわたくしの生涯にあるやうな氣がいたしますといつた。さうそなたは思はれるか、身は、もはやそれをみやこからわざわざ斯る邊土に、見に来ることはないと彼はいつた。

かれらは、生木の匂ひのする根元からややしばらく、無意味とも思はれるくらゐ永い時間のあひだを見入つた。そこをはなれると、秀成はいつた。

「そろそろ立たなければ、明るいうちに次の驛にまで行き申さぬぞ。」

「はい。」

日はやや西の方にまはりかけ、向ふの山がさつと明るくなつたが、坂下の木立はくらみを帯びかかつて來た。

小者は合圖によつて集まり、静か野はくるまの中にはいつた。秀成はそこに立つて供の合圖と、宿舍のことを頭に命じた。出来るだけ日ぐれを避けることが、旅の重だつことだつた。事あらば國司につたへよ、そこまで事あらば隠さずわが名を名乗れと、かれは行きよりも却つて嚴つく旅の用意に氣をつけさせた。

別れるときが二人のあひだに、ひとすぢの秋の日のあかりをはしませた。

「では心置なく立たれい、都にそなたが著かれるころは、身はそなたへの便りを認めてゐるでござらう。」

「お静かにお越しくだされ、楽しい旅のおん禮を申し上げます。」

静かのくるまは動きはじめた。

秀成のくるまも迎へが来て、かれはだまつてそれに乗つた。かれらは東と西とに、異なる日ざしの向きにむかつてしつしつと走つた。まん中にのこる白い街道は兩方に伸び行き、しだいにその距離を遠くのばして行つた。一つのくるまは林の中にはいり、静かの臉はとぢられてゐた。また、ひとつの男ぐるまのなかの人は、もはや、後方には見ることのできない女くるまを振り返り、そしてこれもまた眼をとぢた。

「お別れ申し上げるときはきれいにお別れいたします、そのやうな心にあることは却つてわたくしを嬉しくさせてくれます。」彼女のいつたこの言葉が、秀成には、なぜかしんとしてひびいて來た。供ともの者の足音だけ聞えるこの山中では、この言葉はかれにくり返して考へられたのだ。静かが別れたといふ考へを頭に入れてゐるといふこと、しかも、あの様に乙女らしい好意づくめの心になつてゐることが、彼には恐ろしいものを隙すき見したやうな氣がした。くるまの行かぬ處では、市女笠をかじり細身の杖をもつた静かが、草深い峻しい道を行くのが實に遙かに遠い景色になつて、見えて來た。一緒に來て途中でわかれるといふことの哀れは、市女笠を背後よ

り見送るよりも、もつと幽おくかなものであつた。よい女人だつた、といふ胸の奥の聲は、ふたたび彼の眩くらやきによつてあらはされた。

國司の館では、眼に立つ女人のひとりほ燭を持つて秀成に、夜の庭をあんないした。そして木々のあひだや中の島を隔てたところに、腰をおろすに都合よくしつらへがしてあつた。つかれた秀成はかういふ他人の庭で都で別れた人とあへば、どのやうに楽しからうと彼の頭は直ぐにとらはれた。秋の螢が池の水に光つた尾を曳いて立つのが、かれには人の聲のやうに見えて來た。杳は足をすべりがちだつた。秀成は女といふものが斯くも彼にやどる美しさに、あたらしく驚くより外はなかつた。

「おん疲れのやうに拜しますが。」

かれはやつと此時、かういふ女人の顔をかすめて見入つた。そら明りではその人の顔はふくれるやうな、妙に移動するりんくわくを見せてゐた。ここにも、まれに見る人のよそほひがあつたのだ。

「物言ふのもつらいくらゐ酷く疲れ申しました。」

「はじめのおん旅にておはしますか。」

「さほどでもない、……」

實は思ひみだれてゐて恥かしいくらゐだ、といつそいひたいくらゐだつた。何よりも頭が疲れてゐた。

寢殿にはいると、かれの衣裳をたたみ、太刀の埃をふききよめ、そしてその袱紗をこまかくたたんで、彼女は音もなく去つた。尋常の教へではなかつた。しかも、入れかはり立ちかはるどの女人も、みな、すぐれた立居振舞であつた。庭をあないしてくれた人は國司の姫であらうか、姫でなければ近よれない譯だ、かれは國司がそれを紹介したのさへ、覺えてゐなかつた。ただ、秀成はかういふ雅びいた女人をつかふ國司の、聞えをいまさらの如く知つたのである。

翌朝、口を漱ぐ湯殿の中の戸を出ると、さつと翼のかけが落ちると同時に、一羽の白鳥がもんどり打つて落ちて來た。ちやうど、そこに冠を持つてゐた女人がゐた。

彼女は白鳥を抱きあげると弓の矢を抜いて、その傷をあらためて見た。矢は、深く脚のつけ根を射抜いてゐたが、命にさはりがなかつた。彼女は紙を幾枚もかさね、その傷を上の方からしめつけ、止血の手當をすませると、井のほとりに行つて自らの口に水をふくむと、鳥の嘴から少しづつ水を吞ませた。鳥はふしぎにも羽ばたかずにじつと空に向けてゐた眼を、女人の眼にそそいだ。傷の痛手に水をふくませたのもいいが、さらに、彼女は鳥を芝生のうへにそつと立たせると、そのまま、女人はそろそろと後ろすきりして、鳥に、人間がそばにゐることを次第に警戒させぬ、心づかひをしてゐるらしかつた。鳥は二三步あるくと轉がり、たうてい歩行しがたいと見ると、突然立つて空に上らうとして翼をひろげたが、翼のつけ根にもかすり傷があつて、立つことができないで斜めに下りてゐた。彼女はそこまで、あたかも試して見てゐたやうに思はれたが、すぐ、白鳥にちかづく抱き上げた。鳥はうごかなかつた。そしてお湯殿わきにつるした籠の中に入れ、彼女は籠の上に自らの袴をぬいで内部をくらくし、鳥がこれ以上驚かないためのとばりを垂れたので

あつた。これらの動作に、誰人の手もかりずにただ黙々としてそれに従つてゐた。しかも、そのあひだちゆう、彼女は二度冠を木の枝にかけたきりであり、手からはなさなかつた。勿論、土の上に置くやうな無躰なことはなかつた。

中簾の戸をあけて出た秀成は、冠をうけとるときにすでに手が清められてゐることを知つた。

「何鳥でござるか。」

「見たこともない鳥にござります。朝まだきに不調法な景色にお目を止められ、不行届の儀おわび申します。」

「そなたが親切にいたはつて遣られたので、今朝は一層よい朝のやうな気がする。」

「ご覧じられまするか。」

「いかなる鳥でござらう。」

籠のなかの鳥は、見たことのない、脚もながく黄ろい長嘴の鳥だつた。じつとして、片脚でからだを支へ、痛む脚は腹の毛の中に入れて温めてゐた。眼はおどおど

してゐたものの、稍々しばらくして落著きがあらはれて來た。

「二三日経ちましたら放してつかはしまするが、傷はそのやうに早くに恢復なるものでございませうか。」

秀成がそんな鳥のことにはくはしいことを、まるで信じ切つてゐるやうな間ね様だつた。それよりもつと秀成の氣をとどめたのは、彼女がさういつて頭をかしげて見せたことだつた。そのかしげるくせは美しかつた。

「野鳥の傷は二日ほど経てばなほらしい、この鳥は大きいからもつと早くになほり申さう。」

彼女はふたたび鞋をかけ、秀成にはやくそこを離れることを急がすやうであつた。それにしても何人が射つたものであらう。

女人は矢を秀成に見せた。中黒の矢羽根であつた。それは紛ふ方もない名射手に違ひなかつた。小鳥としては大きくとも、空飛ぶ鳥を射止めるといふことは、なかなかの晴れがましい業であつた。

「この者に狩の日に參るやうお傳へあれ、身が下向と知つてのわざであらう。却却の者と知ります。」

女人は、はつとした氣色だつた。さすがにここまで心をとめてゐる秀成を、彼女はなんとなく見なほすふうであつた。秀成は秋ぐさの穂がまつすぐに、まるで絲のやうにか織い莖を立ててゐるのを見入つた。彼はやつとゆふべ庭をあんないしてくられた人は、この女人であることを知つた。ゆふべは静か野のことばかり氣になり、少しも他に眼がやどらなかつた。中一日置いて立つのはあまり早いかぞへて見たが、立つことばかりが急がれた。静か野の身のほそれがかれの腕にもたれかかつてくる、そんなにも別れて來た深いいつくしみばかりの夜だつた。

「ゆふべ燭ゆふべを持たれたのは、そなたであつたか。」

「はい。」

「素氣なくいたしたであらうに、思ふことがあつて何も眼にとまり申さなんだ。」
「長途のおん旅路にておつかれと拜しました。」

「ゆふべそなたは白綾に桔梗のもやうの著類をつけてゐられたと、身はゆめのやうにおぼえてゐるが。」

「その様なものを著てゐて不束いたしました。」
恐らくこの女人も、あまり取り付きやうのない、空返事ばかりしてゐる秀成と思つたことであらう。酒宴半ばにかれは一人になりたくなつて、廊下に出ればまた變つた女人がついてゐた。どこに行くにもかげのごとく女人のつき添ひがあつて、彼は腹立たしくらゐであつた。しかも、どれも、静か野へ心をやるみちびきにならない者はなかつた。色や形や聲や腰つきや、さういふものがそつくり静かとすれちがひになりやすい程、静かの身が緊つて目について來た。

「ゆふべ身に菓子あまみを取らしてくれたのはそなたのやうに思はれるが。」

「いいえ。」

彼女は赧かたじけなくくなり秀成は言はでもがなな、言をいつたものだと悔いいた。

「急ぎのお使にてあまみの用意はなかつたやうに覺えまする。」

秀成は、あれは静かと山中でしたためた甘みであることを、つかれた頭の中で思ひ返した。

國司吉宗は、その夜も松を燈し篝火を焚いた。れうらんたる夜は何處から集められたのであらう、もろもろの姫の君達は、かはるがはる秀成の前に現はれた。

「今宵はゆるりとされたい、ゆふべは、いかうお疲れのやうに見えた。」

「あまり土器かほちは取らぬ方で無調法仕る。」

「近江の姫達は何と思召さる。」

「近江と聞くだけに卵たまごのやうに美しくおはす。ゆふべお庭先をあない下されし人、けさも白綾の衣裳にて目もさめるやうな氣がいたしました。」

彼はふと鳥のことを思ひ出していった。

「當國にて弓の名手は何と申す者がゐられる。」

「弓の名手といひますと、」吉宗は急に語ことばにちからを入れていった。

「守人もりんどと申す者が當國での名手でござらう、射てぬといふものもない者、」

吉宗のいふ几帳じやうぎには坐つた一人の姫は、秀成と目を合してから、かすかに禮をした。秀成は誰の眼にも、女の眼に變つた美しさがあることに驚いた。眼といふものの千差萬別の境にある美しさは、一たい何處まで行つたら盡きるであらうと、さう思つた。

「今朝ほどの白鳥はやはり彼、守人もりんどが射つたものでござつた。仕官つかまつりたくての弓でござらう。」

彼はそこで女人のことを尋ねようとしたが、口を噤んだ。聞いても、また行きあうても何の故があらう、早く静かが館にもどり、身をもたらせ眼をつぶりたかつた。かれは女の肉たいにもある山野の景色を、かぞへ出した、といふことは静かの美しさを様々な山路や峠や平にくらべて見たかつたからだ。それほど、此處の姫達には退屈もし、また、彼はつきすすんでそれを見分けようといふ氣がなかつた。

だいぶ更けた頃、突然のはげしい雷鳴があり、稻妻のあかりは秀成自身の狩衣の色までを、見きはめさせた。篝火は消え、大燄油の火は消えた。姫達、仕への女は

ことごとく一つ處にあつまつた。雷鳴は歌ます光はたえ間がなかつた。

秀成は先刻から或る一人の女人の顔を見入り、稲妻の光にうき出る顔をじつと、くらしい間にも見入つた。それは、すさまじい光の中でその顔自身が恐さに耐へてゐる表情であるよりも、もつと緊張した美しさをもつてゐる顔だつた。はつとした光は庭も正殿も、そしてあらゆる物を映し出してはたちまちに消えて行つたが、ただひとつ、かれの眼中に切長な、黒瞳がいつも真中にただ静かにかかつてゐるやうな顔であつた。秀成には、それを見入つてゐることで、静かに會へるやうなそんな感じであつた。

「これは稀有なことでござる。秋になつてかかる雷鳴があるとは覺えない。」
吉宗ですら稀有な天候を氣味わることがつた。やがて大雨になり人びとは葺戸をおろし、そして渡殿を右往左往したが、彼の見てゐる女人は依然席も立たずに、自分だけを守つて立ち騒ぐことをしなかつた。膝の上にある二つの手と顔とだけ、電光のなかで動かすに坐つてゐた。恐らく雷鳴がしづまるまで、ああやつて坐つてゐるの

であらう。

「ご免、」

秀成は立ちあがると吉宗に挨拶をした。そして彼は先刻から覺えた彼女の位置を殆ど手さぐるやうにして、渡殿近くの柱のもとに行つた。大勢の立ちさわぐのと、大雨の濁つた音とであたりは依然、騒然として物の見分けが立たなかつた。

秀成は言ひやうもなく優しくいつた。

「恐うござらう。」

「それほどでもございませぬが、恐うはございます。」

「からだをらくにして坐られい、硬くしてゐられると一層稲妻が應へますぞ。」

「はい、よいことを承はりました。これですつと致しました。」

「これで二夜お目にかかることに相成る、ゆふべは秋草の中にて。」

「今宵はまた雷様のお怒りのなかにお目もじ仕りました。今朝ほどの白鳥もこはいいこととでございませう。」

「傷は？」

「もはや固まりましてございます。稗もさしつかはしました。」

「それから菜のごときものを石にて揉んでやられい、鳥は青菜が絶えることが禁物でござる。」

「はい、つかはします。」

「それから身が立つ前に野に放してやつて下さい、荒鳥の來ぬ若い林の中がよいやうに思はれる。」

「何時お立ちになられます。」

「中二日、いや中三日の後に立ち申さう。」

秀成は、中二日の滞在がここでは、中三日といつて了つた。この些かの心變りが彼自身にも思ひがけない、不意の出來心であることを知つた。

「狩の日にはまたお見えになられると拜察いたしまする。」

「狩にはお供してまゐるが、おあひ出來申すか、いまからは計られぬ。」

「何故にございます。」

「忙しき身ゆゑ、さてそなたは何と申されるか、」

「綾の君と申します。」

「綾の君どのか。」

大雨は歇まなかつたが、雷鳴はしづまり殿中はあと片づけの用意の燈をかかげた。秀成は柱のもとを去らねばならなかつた。かれはもう一言いひたかつた。今宵寢殿の戸のそとまでおはこびあれ、それまでに、その戸の内側にお待ちまうすであらうと、かれは、いつて來たかつた。

秀成が寢殿にはいつたとき、几帳のかげに一つの蟲籠があつた。そこから、秋の夜をすだく青い蟲が幾疋も籠の目を上り下りしてゐるのを見入つた。何人がかういふもてなしをして呉れたのであらうと、かれは、高い天井にまで牙えた鳴く音いろが、寢殿をくまなくひびいてゆくのを聞き入つた。戸がそつとひらかれた。

「御更衣をなにとぞ。」

「これは忝けない。」

彼は衣をあらためた。

「これなる蟲籠はどうしてここに入れられたのか。」

「いえ、在じませぬ。失禮なものを誰人が仕りましたのでございませう。」

彼女はその蟲籠を取り除かうとして、几帳の方に行つた。この女人ではない、どちらにしても女人の心づかひでなかつたら、かういふ蟲籠をここに置く筈がなかつた。

「いや、そのままにして置くやう、實は、身は蟲の音色を好む者ゆゑ、吉宗殿の心づかひと察せられる。」

「大殿様のお指圖でございましたでせうか、それとは知らずに失禮いたしました。」
彼女は去つた。そして秀成は依然何人の思はくであらうかと心でさぐつて見たが、綾の君の外に、この氣づかひをしてくれる者のゐないことが判つた。しかし、姫君である綾の君がここまで蟲籠をはこんで來るといふことが、ありさうにもないこと

だつた。しかも、寢殿はもう更け互つてゐたから、ここまで忍ぶことは出來ない筈であつた。もしそれを強つてここに蟲籠を置いて去つたとすれば、秀成にはそれだけのことで最早ものの美しさをさぐりあてたやうな氣がした。

次の日、秀成は國司吉宗の一行と、湖近くの狩場を巡視するため馬を驅つた。湖べりの秋晴れはすべてかがやいてゐる風景のなかで、はじめて彼は静かのことを忘れてゐる時間に出會つた。吉宗は湖から少しはなれた沼の明りを見出したときに、珍らしく雉子が四羽揃つて餌拾ひしてゐる虹のやうな姿を見た。吉宗は供の者の最後についてゐる若い武士に對つていつた。

「あの雉子を射て。」

若い武士は頭を振つて見せた。

「あれは雉子の親子づれにございます。哀れに覺えます故お許しの程を。」

「さうか。」

さういふ吉宗と若い武士とに、秀成は眼をとめた。親子であるために射たぬといふ若い武士の心根が、けふの秀成にやさしい心を見せてくれた。

「一番さきに歩いてゐるのが母雉子、あとの三羽はそのこどもらでございませう。羽色のうすいのと、濃いのとで遠見でも親子であることが分ります。雛は羽色もけばしく見えます。」

若い武士は朴訥な言葉つきだった。

「あれは何といふ武士でござる。」

「白鳥を射つた守人にござるが、守人、これへ。」

守人といふ武士は、秀成に今朝ほどの無様を詫びた。

「親御は？」

「獵人をしてゐましたが亡くなり、父につれられて山にまゐることに、しぜんに弓をしぼることを覚えました。」

「親子の鳥を射たぬことは父御からのお心づかひであられるか。」

「獵人はみなそれを避けて居ります。」

「夫婦鳥は？」

秀成はわらひながら、どう答へするかを待った。

「それと分れば避けますが、分りませぬときは仕止めます。」

「身は打たぬな、分らないとすれば止むを得ぬ。そちは身と續いてまゐれ。」

「はあ。」

守人は秀成の馬に續いて起つた。馬をこなすことにも長けてゐると見え、らくらくと彼に續いた。

「けさほどの白鳥には後刻手當をしてまゐりましたでございます。」

「さうか、それは大儀であつた。飛び立つことが出来るだらうか。」

「もうすぐにも立てるやうにございます。」

「綾の君はそのやうに昨日申さなかつたが、そちはお目もじしなかつたのか。」

「ご不在にござつて手當だけ致してまゐりました。」

「綾の君どのは立派な女人であるな。姫は蟲の鳴くことを好んでゐられるか。」

「それは存じて居りませぬ。」

ゆふべの蟲籠のことは、やはり守人では分らなかつた。

かれらは小川を越え、野を横切り、畠に出ながら一つの村落の入口にかかつた。

そこは南に當ると見え、小鳥のむれが稗の穂にあつまり、榛の實にもむれてゐた。

守人は、そこで數羽のみにくい翼の大鳥を射つた。そしてそれらは悉く翼の骨のみを射抜いてあつて、命にかかはる肉體に矢羽根のとどいたのはなかつた。どの鳥も元氣な木に止つてゐるときと少しも變らない生々しさだつた。秀成はさういふ好み
を矢がしらにとどめる守人に、名射手を感じた。かれは、しかも、馬上から黙つて
射ち、自分の弓については語らなかつた。獵人であつた父に、見様見真似で何時と
なく覺えた弓であるから、戰場ではたらけるかどうかさへ、謙遜していひ過ぎつた。

村落の長の家では、湖からの光つた魚が料理され、しかも、村の長はそれらを生
かした木の大きな器に泳がしてはこんだ。ちひさい湖の魚は、海のものよりも、か

らだにほそみがあつて姿は優しく、なよなよしてゐた。或る魚は秀成の眼を永い間
奪ひ、かれは感に耐へて見入つてゐた。ふしぎにそれらは女體に關聯されたほそれ
であり、なまめかしいすべすべしたものであつた。或る魚はかれの指と指の間を、
ほとんど腰をうねらせながら水の中ではねて見せてゐた。

「あれは何を入れる箱か。」

秀成は白湯を持つてあらはれた娘に、一つの美しい、恐らく絲かがりで出來たら
しい箱を見付けてさう尋ねた。嘗て見たことのない箱だつた。

「小布切を入れる箱にございます。」

「見せてください。」

「はい。」

「これは彩色絲でかがつたものらしいが、そなたがされたか。」

「小布切の失せないやうにしまつて置くためでございます。」

「これ一箇しか持たれぬか。」

「べつに大箱がございます、あなた様がほしいと仰せになれば、差上げたく存じます。」

末座にゐた母親らしいのが、これこれ、失禮なことを申上げるでないと注意したが、娘の無邪氣さは、それには頓著しなかつた。秀成はかういふ娘ごと話したこともはじめてなら、その物言ふことの美しさには、ほとほと感動させられた。

「是非いただきたいものだ、都にはかかる雅びた箱などはない。」

「どなたかにお贈りになられますか、それともあなた様がお持ちになられますか。」

「よしある人に贈らうかと思ふのだが、」

「お姫様でございますか。」

「姫にあげたいと存じる。このやうな箱は都には目にとまらぬ。」

秀成はもう少しで赧くなるところだつた。だが、かれの見識はその恥かしさをとどめることが出来た。娘は少々お待ちくださいといひ、きふに奥にはいつて行くと、それと同じ箱をかかへ、秀成のそばに近々と寄つて坐つた。それは、この娘ごのた

くましい、つやつやした黒髪がかれの目に近く、匂うてくるやうな近きであつた。

「これはびは湖の小石でございます。小石が上げられるところは、小石ばかりの汀になつて居ります。」

あぶらのやうに光つた黒い圓い石だつた。それらは、手ですくふと、指の股から落ちる小石と、箱にある小石とが觸れあひ、かちかちした快よい眩やきを發してゐた。加茂の川原にも、比叡の流れにも見られぬ大湖でなければい小石だつた。

「そなたが拾ひあつめたのであらうの。」

「はい、わたくし大湖にあそびにまゐりますと、きつと、拾つて持ちかへつた石でございますが、これも、お姫様にさし上げてくださいますか。」

彼女は箱のまま秀成のそばに、ずつと箱をすすめた。秀成は悲しいもの哀れなもの、そしてそれは喜びといふものの正味をすくつて見せられたやうな氣が、一どきに胸を打つて來た。

「折角そなたが集めたものを貰つてかへるのは、無駄な氣がする。」

「いいえ、わたくしはまた拾ひにまゐられますゆゑ、何卒。」

「ありがたう存する。」

「それからこれには貝がらがいづつてゐますゆゑ、ご覧ませ。みな大湖の貝ばかりでございます。」

「ほう、」

秀成はべつの箱をひらいて見て、そこに、淡水の貝が一杯つめられてゐるのを見た。さきに廣がりを見せた法螺の貝のやうなのや、小指の爪しかないうすいものや、平つたい土器かひらけに似て虹のやうな光をひそませてゐるものや、また、悲しげに背中に黒子模様をもつてゐるものなど、淡々しい湖水に生きてゐたふしぎな貝がらが、娘の手によつて秀成の手にならべられた。

「これはべんどう寺様と申す貝でございます。」

「ほう、べんどう寺様か。」

「これがえび貝、えびによつて居ります。」

「なるほど、えびに似てえびにあらざる貝か」

「これがびはこ貝。どうぞこれもお持ちくださいませ。」

娘はかういふと両手をついて、叮嚀に頭を下げた。秀成はどういつていいか分らなかつた。静かに見せるだけでも驚きであらうに、これが悉く家寶にしたら静かのよろこびの顔を見るやうであつた。

「何ともお禮の申し様もない、」彼は母親の方に向いていつた。「このやうに頂いてよいのか、そなたの許しも得たうござる。」

「娘の物は娘の物ゆゑ失禮になりませぬやうでございましたら、お持ちかへり願はしうぞんじます。」

秀成は黄金一枚をつつんで、娘にあたへた。娘はそれを辭退していつた。

「またお越しの折にお姫様もお供仰せつけられませ。」

「さうつたへ申さう。」

秀成はこころから笑つた。

かれらはかくて村の長の家を立つとき、娘は馬上の秀成にいった。

「近江國近江郡の近江九重をおわすれなきやうに。」

秀成はそれにはすらすらと答へた。

「五條遠井秀成、狩の使にまゐつたこと永くお覚えあれ。」

一行の乗馬は大湖の汀づたひを行つた。ただ見る大わだつみのそれをうつした湖心は、何處まで廣がつてゐるか分らない曠たるものであつた。ここでは、さすがの秀成も、もはや女人のことに思ひを遣るいとまともない、壯麗豪快の景色に女性的な波の音をまじへてゐた。汀あれば汀ごとに景色は岐れて、烟乎として遠くでその尾が消えてゐた。彼はゆるすられながら後ろの守人にいつた。それは、斯る景色のなかを馳驅してゐなければいへない言葉だつた。

「守人、そちは愛でつる人があるか。」

「ございませぬ。」

「嘗て一度もそれについたことがないか。」

「ございませぬ。」

「女がほしくないか。」

「弱冠の者は、また身分のない者には、いつくの姫もよう會つてはくれませぬ。」

「けふの娘ごはどうだ。」

「玲瓏としてまるで珠のやうな氣がいたしました。」

川があつた。秀成はほとんど一息に飛び越え、守人も同様な手綱のしぼりを途端にゆるめ、馬は彼岸についた。

「美事。」

「はつ。」

例の沼はぐるつと一廻りしたあと、小さい沼、濁つた沼、から沼が續いた。それ
はたちまち飛び越え、はね泥は天に向つて弾じき飛ばされた。

「深いぞ、沼のへりを縫へ。」

藪壘と松林とが見え、道路はふたたび坦々たる平に出た。かれらは馳りつづけた。

かうしてゐなければ秀成は氣持の鈍さ、愛情にあふれる鋭い鈍さが感じられてならなかつた。ただ髣髴するものは白哲長身の静かのすがただつた。

「秀成様、」

「何か」

「ざれ言を申し上げてお咎めはございませぬか。」

「殿中ではない、好きに言はれい。」

「あなた様は都にお姫様を置いて見えられたやうに拜しますが、いかがなものでせうか。」

「當つたぞ、そのやうに見えるかの。」

「娘ごとの應對、白鳥の事、また供の者へのいたはりはお姫様のある方でないと、さうはなされませぬ。」

「さうとは限るまいぞ、土砂崩れた氣をつけ、」

「は、」守人は美事に越び越えてからいつた。「失禮ながらあなた様の目付を見て

も判ります。」

「さうか、實は姫とこの旅の途中で別れたのだ。だから傷みやすくなつて來るのだ、他言するな。」

守人は若い者のつねとして、あまえるやうな親しい言葉つきになつて、うしろから大聲でいつた。

「綾の君様をどう思はれます。」

「また會ふことのできない姫だ、あの姫をおもふことは苦痛にちかいぞ。」

「してお會ひになられませぬか。」

「いや狩のお供の折にお會ひするであらうが、もの語りは出来るかどうか。」

「わたくしめお使申し上げます。」

「それには及ぶまい、あ、綾の君といふ人もわが生涯をゆすぶつて來る。」

彼はひとり言のやうにいふと、つむりを振つて口のうちに静かの名前を呼んだ。綾の君について静かは稀薄にならうとする、あるひはなりはせぬかといふ願慮は、

かなり深いものであつた。秀成はいやでもそれを知らねばならなかつた。

「綾の君様は白鳥を狩の日まで飼ふと仰せられてゐました。」

「何故であらう。」

「かたみの生きものとして手づから放すにはお別れするやうな氣がすると、その様に話されました。」

「さうであつたか。」

「お目にとまつたものは何事もつながりがあつて、お姫様には素氣なく過ぎされないのでございませう。」

秀成は黙つて了つた。疼くやうな哀れが彼の手を取つて、引き戻さうとした。それに抗ふことなく、そしてまた従くこともなく、かれはその渦から身をはなさなければ、ならなかつた。

「守人、もう綾の君のことは話してくれぬやう。」

「はい。」

「二人の姫をいつはることは、身には出来ないことだ。」

間もなく道路は、國司の邸近い松の林が見える處に出た。かれらの乗馬の蹄の音がきこえると、邸の外に迎へるため、仕への御達がならんでゐた。綾の君を最先頭にしたこの迎へは、秋草の何の花になぞらうたらそのしとやかさを現はすことが出来たらう、綾の君は金糸をかがつた衣裳にその美しい面をかしげて、西づく日をまぶしがつてゐた。

この夜の酒筵には山のもの湖の魚とが盛られてゐて、秀成はそれらを都にある静かにも食べさせたい、妙な子供のやうな心になつた。自分がうまく食すものが彼女にも食べて貰ひたいといふ心は、肉たいばかりでなく、もつと親しい、殆ど同體的なかんじのものであつた。かれはその頭の方をそつと器のまん中に置き、自分はその尾にある些しのにくを食べてゐた。さうすることが彼には取分け嬉しかつたのである。

綾の君は箸をつけない頭の方のさかなに、時折、眼をそそいでいぶかしい思ひが

し、酒をみたしながらも、秀成は一向箸をつける氣色がなかつた。綾の君は、けふの野遊びに何が彼の氣に入つたか、湖はどうであつたかと、たづねた。

「近江ノ國の優しさは湖のさざなみに盡きるやうな氣がします。まるで或るところのさざなみは母の頬のやうに穩かでござつた。」

「あのあたりは何時も波のないところでございます。」
彼はふと思ひついていつた。

「吉宗殿、こたびの旅に母から何か申越しは致しませんでしたか。」

座をへだてた處に國司吉宗はゐた。かれは母堂からの便については、勿論なにごとも言はなかつた。

「べつに便などはござらなんだ。」

「では改めて申遅れましたが、母からもよろしく申してくれとのこととござる。」

「母堂にはいかう年を召されたことであらう、何卒よろしく取做して下さい。」

秀成は便りのことは知らなかつたが、吉宗がこたびは特別な計ひをするであら

うといふことが、かれの頭から去らなかつた。だが、それらしい事はなかつたと言つていい。

綾の君はなにとぞ、それも召し上り置かれるやうにといつた。

「あまり美事でござつて母上の分として取り分け仕つた。」

「これは恐入るご配慮、ご母堂もお喜びであらう。」

吉宗はあまりに見たことのない、下々の人の心づかひのやうなものを感じたが、さういふ心づかひはまた上の方にも行はれることもあつた。しかし、人は愛づる子供とか、女人とかにさうするものだつた。かれは何となく斯ういつた。

「姫ごにもおはすのではないかと、やつがれは過つて考へ申した。」

「父上様。」

と、綾の君は柔らかにたしなめ、自分であかくなつた。

「姫などは友にはござらぬ。」

秀成はきつぱりとさういひ、國司だけあつて眼はなかなか鋭いと、かれはその間

題を避けたかった。おなじ思ひは綾の君にも、あつた。彼女は話頭を變へた。

「湖には冬も氷の中を泳いでよろこんで氷とたはむれてゐるさかなが棲んで居りまする。」

「それははじめて聞き申した、稀有なことでござる。」

秀成はふと白鳥のことを思ひうかべた。守人のいふやうにそれを飼ひならすのか、どうかを知りたかつた。

「白鳥はいかが致された。」

「この頃よくなじんで朝早くには高囀りをいたし居ります。眼がさめるのを毎朝待ちまうけてゐるやうでございます。」

「傷は？」

「もはや痕方もなくなりました。」

しかし綾の君はそれを飼ふとも何ともいはなかつた。それを尋ね返すことも秀成にはできなかつた。

寢殿にあがると、ゆうべの蟲籠は今宵も几帳のかげに置かれて、しづかに機織る合の手をいれてすだいてゐた。それは疑ふべくもない、綾の君の心づかひであることが分つた。籠の目を抜く長い鬘はところどころ不意にあらはれ、それだけで中の蟲の動いてゐるのが分る程、幽かにも優しい使のやうなものであつた。一つの聲が天井にひびいて寢殿のあらゆる隅々、柱、上壇の床、床脇といふやうに渡つてゆくと、次の蟲の音がまたそのあとにつづき、廣やかな寢殿一杯にひろがつて行つた。笙とか箏ひょうごとか笛などの音楽に見られない低い忍びやかな顫音は、思ふまま彼の胸をつたつた。毎夜の例になつた讀物を伏せようとする、遙かな几帳のあたりで、たしかに衣すれと足音をきいたが、それは耳のあやまりかも知れなかつた。何故かといへば斯うも静かに人が忍んでも、歩けるものでなかつたからだ。彼は殆ど聞きとれないくらゐの聲を、几帳の方に向いてかけた。

「誰方たれかたでござる。」

だが思ひがけない答へが、おなじ低いこゑでこたへた。

「わたくしでございます。唯今、蟲の餌をつかはしにまわりました。」

「綾の君どのか、数々のお心づくし忝けなうぞんする。寢殿にゐて野の景色のなかに臥せるやうな思ひがいたします。」

「かまびすしくはございませぬか。」

「ゆめにも其様なことがござらぬ。」

しかし、綾の君の姿は、几帳のあなたで見られなかつた。どうやら蟲の籠は別に一籠の用意がされてあつて、それは几帳のかげの衣裳筐の上に置かれてゐるらしく、蟲合せの曲をかなでるやうにしてあつた。

間もなく音もなく綾の君はほとんど聞えぬほどの低い足音で去つた。

「おやすみあそばせ。」

そして蟲聲はふたたび寢殿のなかを、おもふまま鳴きつづいた。今宵入れた蟲籠のなかでは、おのづから聲音にも變りがあり、ゆふべに増して張りがあつて美しかつた。かういふ臥して野の景色をとらへることが、みやこでも、それを敢て行ふ雅

やかな女はゐなかつた。彼は静かにも、この蟲籠を置くことを話し、寢殿のなかでそれを聞き澄したいと思つた。

國司吉宗は秀成が都にかへる前に、五條の母堂に、秀成が滞在中の行狀について、斯う認めて送つた。「秀成殿、仰せのやうに仕への者にも、心うごかざる趣にて、母堂様のお心になひ申さざるところ、小官の行きとどかざる次第にてお許しありたく、秀成殿、酒もあまり好ませられず、若き武士として申分なき方と存ぜられ申候。下々へのいたはり等いまだときの人と思はれず……」

翌日秀成は國司の家を立つた。綾の君はさすがにさびしさうであつた。都の人がおとづれ来て、ふたたび都にかへるといふことは、田舎人にはしばらく物も手につかぬものであり、その心のさびれは綾の君を一きは清々させて見せてゐた。

「都にお越しのせつは立寄られい。加茂の秋祭も間近なころ。」

「ありがたくぞんじます。」

綾の君は馬上のかれを二三歩あるきながら送つた。かれも何度か振り返つて、この人とともに秋になる村と道路とを眼に入れた。かくて秀成の一行は山路にかかり、中三日を隔てたさきの日の景色に、またもめぐり會つた。秀成は身にあやまちのないこと、ことごとくに危なかつたとは思つたが、いまは何事もなかつたことが心嬉しかつた。

山路の景色はすこしも變らず、あの日のままであつた。秀成は國境にくると、馬を停めた。そして彼は一人になつて先の日に、檜の木を削つて刻んだ「静」と「秀」の二文字の跡を見て、また、馬上の人になつた。誰も彼が何のために山中のわき路にそれたかは、知るよしもなかつた。

或る山に近い村と野のあひだに、一軒の廢屋があつた。それは往きに静かにはあはいふ家に住んで見たい、そとは廢屋にして中は美しくして住みたいといったが、彼は何となくそれに注意して見過ごして行つた。若しかしたら、静かはそこに待つて迎へてくれはせぬかと思へたからである。彼は迎へに來てくれたらどんなに心は満

ち足らへるかも知れないと、妙に一刻もはやく會ふことが急がれた。

夜に入りそして明けた。長い一夜だつた。一行が平らな道を少しばかりの山に入り、そしてまた平和に出たところは、もう都の入口に近く人家もまばらに林の中に見えて來た。川の岸に出ると橋のきはに一人の女童が、朝日のあたらしい金色にそまつた野の草を一束さげて、立つてゐるのが見えた。振分髪もどれだけでも伸びてゐない女童であるが、彼女は秀成の一行を迎へるために其處にゐるやうに思はれた。秀成は女童に近づいて見て、はつと心が打たれた。女童は秀成がそれと知ると同時に、怜しげにうしろ向きになり橋を渡らずに、土手のうへを歩いて行つた。

秀成は供を先にやりすごし、自分だけ道を戻つて土手のうへに登つた。女童はそこで秀成を待ちまうけてゐた。

「おがへりあそばせ。」

「迎へ大儀、して静かはいづくにゐるか。」

女童は一軒の農家をゆびさした。そこに繁り立つた紫苑のむれがあり、静か野は

あたらしい衣裳を着けて立つてゐた。

「お迎へにありがとうございました。」

彼女は女童の髪をなでながら、今朝、曉に都から來たのだといった。

「どうして身が到着の刻限を知られたか、誰も知らぬ筈なのに。」

「きのふは中二日、中二日経てばと館にてお待ちしてゐましたのに、おかへり在らせられず、さすればけふはおかへりに違ひないと存じました。」

秀成はしばらく農家に入り、そして静かの顔を永い間見入つた。二日見ないあひだに、二日分だけ美しさがたまつてゐるやうな顔だつた。

「いかがなされました。」

静かは自分を見入る秀成の眼の顫へをかんじた。眼にをのきのあることを初めて知つたのである。そしてそれ程までの秀成とは、まったく彼女は迂濶にも知らなかつた、男といふものの眼の顫へが、かくも深々として静かにつたはるこの世のものでないやうな強さが、彼女の全身を蔽うて來たのであつた。

「そなたに會はせたい男がある。こんどの旅では身は一人の武士を見つけたのだ。」

「そしてその方様は？」

「表に待つてゐるであらう。呼び入れられい。」

静か野は女童を伴うて表に出ると、一人の若い武士がねばり強い草の莖で手綱を編み、それを足でしごいてゐた。眼、眉、唇、それらは張つたわかさによる重い威力を見せてゐた。

秀成はいつた。

「守人、そちに引きあはせる。これが話の姫だ。」

静か野はいつた。

「永くみやこにあられませ。」

守人は赧くなつて頭を下げた。そして再び顔をあげたときに驚きの深さがわかるほど、充奮した眼つきをかくさうとしてゐるやうであつた。秀成は別の意味で静か野の美しさの反射が、守人の顔いろによつてあらはれてゐることを知つた。

守人は妙に秀成のうしろにいつも女を感じてゐて、それが眼の前に見たとき、守人の頭にゑがいてゐた姫と少しの變りのないことに驚いた。かれはさういふ女に何處かで行き逢ふであらうといふことを、あまりにまざまざと見たので、眼に疼きをかんじた。

「守人、そちは静か野に弓を引くことを教へるやう。」
守人は頭をさげた。

「けれどもお姫様に何で弓をひく要がございませう。」

「弓くらはは覺えてゐた方がいい。」

かれらはその翌日から弓をひいた。秀成はさういふ静か野が守人といふ一人の男があひだにゐること、いままで見たことのない静か野の快活と笑ひ聲とを、耳にしみて聞き入つた。静か野の腕かひなは朝の光のなかに、なまなまして伸べられ、そこにも、彼は外ではたらく腕の美しさに見入つた。

この山中の家にも、東京の本屋さんとか雑誌の人とかが、用件を持って訪ねて来るが大抵出版とか原稿依頼とかで、言はば好ましい客であつた。東京の家なら一椀のお茶をすすめるくらゐであるが、遙々東京からの訪客には出来るだけ歓迎して、驛から町までの長い往還の労だけでも、ねぎらひたかつた。冬の間は想像外の寒さで、それも大てい朝早く著く汽車なので、すぐ炬燵にはいつて貰ふことにしてゐた。春とか夏は客も喜び、此方も樂であるが、何時でもふる山雨の氣づかひもあつて、驛に赴く街道にも氣がかりがあつた。客は米を持ち、辨當を用意してもものしい旅装束をしてゐたから、町などでは、すぐ東京の人であることが分るのだ、そして町はづれから僅か一二丁目の畑中道で、おなじその人の背後姿を見つけて、息子や娘は家に來た客であることが分るといつてゐた。

輕井澤で降りた雑誌や出版事業の人は、先づ正宗さんをお訪ねしてから此方に廻り、小諸まで汽車で行つて高濱虚子さんをたづね、そこで用事を済すと岩村田近くの佐藤春夫君をおそひ、長驅して松本にゐる宇野浩二君を訪ね、さらに飯田に岸田國士君や藤森成吉君に用件を話して、さらに越後に出て、赤倉温泉の堀口大學君を訪ふ記者の人もゐた。小諸と松本で泊らなければ、飯田で宿をとるらしいが、三日はかかるらしかつた。これだけの作家が信州の驛々に屯してゐたから、一廻りすれば顔ぶれはそろふ譯であつた。東京からであるから輕井澤が最初であり、追分宿には堀辰雄君、片山君もゐるので、ここでも顔ぶれはまとまるわけだつた。堀辰雄君はからだに充分でないので、客にあふと昂奮しやすいから、あなたから東京からのお客さまに事情を話していただいて、追分宿には廻らないやうにしてくれといふ奥さんからのことづけで、追分には寄らないやうに私ははなしてゐた。信州の廣さは日本一だが、こんなふうには作家がそれぞれの處にゐるのといふものは、心たのしいものであつた。といつても、佐藤君にもまだ會はず、どうしてゐるか、輕井澤に用

事のある村の人にたのんで、春夫君の使の人も見えたが、此方は家の様子なども見せて、どうやら暮してゐる趣きを知らしたりした。胡桃澤といふ佐藤君の大家さんにあたる歌人は、秋にはいると千曲の鮎でもお目にかけてようといつて去つたが、その人を見て何か安心の感じだつた。佐藤君の凍豆腐しもとうふといふ詩を讀んで、僕もまた凍豆腐といふふしぎな豆腐を背景にして、一詩を賦したいと思つたが、佐藤君の詩をよんで、うまくうたつてあるので放棄した。凍み豆腐はほんとに凍みないところ、凍みてゐるところとが、吊して置くと變に氣になり、詩でいへば凍み徹るのも悲しければ、凍みないでふにや／＼してゐるところも悲しいものであつた。だからかれ凍豆腐に言寄せて、ことしで三度目の冬越しをする便にしても、信濃の生活がうたへるわけであつた。この凍豆腐を中村武羅夫氏にお送りして君知るや知らずやと敢てたづねると、四五年振りで食べたといひ、いまは植木屋もやりお百姓もやり、その折にいられた南瓜のたねはうまく育つて一貫二百目あると、近頃たよりがあつた。人賢にして野に下らざるなきとき、文學者があちこちの田舎住ひをして、なかなか

歸京しようとしなくて落著きはらつてゐるのも、最近の日本に於ける文士風景であつた。私などは今年も冬越しをし、來年もまた冬越しをするかも知れない。しかし遣々、信濃に滞在してゐる文士が、一人去り二人去りして、最後に私がこのつたとしても、多分落著いてゐられることであらう、或ひはまた同業が去つたと聞いては、落ちついてゐられないかも知れない、私は誰にもあひたくはないといふ一面と、ほんの些かのことで誰にでも會ひたい氣持が充分にあつた。堀君が近くの追分宿にゐても、まだ一度も訪ねないのも、時に病氣が決くないので控へたりしてゐて、もう、三年経つてしまつた。その三年の間に堀君もたつた一度しか輕井澤には出て來なかつた。人間は思ひ立つた時に訪ねないでゐると、ふたたび會へないことすらあつた。萩原君なども、そんな訪問の怠りからしてたうとう會へなくなつたのであつた。

この間、座談會といふものがあつて正宗さんを圍うての會であつたが、湯に入り髪を刈つてゐるところに司會者が來て、出席してくれといつたが、會とか何とかには出たくないので断ると、正宗さんも見えてゐると聞いて出席したが、馬琴の話を

した正宗さんは淡々たる物語をされて、正宗さんも、かういふ十四五人の會合では、構へがなくおつとりとはなしされてゐるのに敬服された。僕の正宗さんの印象記を評して上林曉君が、正宗さんの前でオドオドして卑屈なくらゐるのであると書いてゐたが、そのオドオドが大へん氣になり、卑屈も氣になつた。上林君はあれを讀んで僕がこの大家とはなしをしてゐる喜びを、僕流の尊敬の心でかいてゐるのを、そんな意味に取つたものかと思つた。オドオドどころか、どこにも隙間を見せてゐる正宗さんは、人間的威力などはちつともなく、なんとなく尊敬してみたくなる度合を快よく對手にあたへる人である。徳田秋聲さんなども、話してゐると無條件に尊敬してくるだけで、此方をオドオドさせるものは一つもなかつた。いい人だなといふ感はその人の前で少しくらゐる、やんちやを言つてみたくなる程、正宗さんはらくな人であつた。世間でいふ皮肉が辛辣だとかいふ側でなく、年とると自然に言葉が短かくなり、不必要なことを言はなくなるものである。おそらく正宗さんなども、家庭では用事以外ははなされないかも知れなかつた。僕なども叱ることより外に言葉

がない、叱るといふことは親密以上の親密さがなければ、これも却々言葉としては現はれて來ないものであつた。この日、席上で伊澤さんに久瀾りでお目にかかつたが、文學でも、詩のことで見當ちがひのことを話され、平然として近代の詩に韻がないといつてゐた。かへりに僕の家へ寄つて庭をひやかさうといひ、近道をとつて家に見えたが、縁側に腰をおろさないで、いきなり座敷に上ると床の間にちやんと座り込んで了つた。たしか二度くらゐ見えたが勝手知つた家のやうに少しも遠慮をしなかつた。そして僕は一生のうちに俳句は一句しか作らなかつたが、一つ發表するかな、といふと、忘れたが何とかいふ俳句を一句示した。自製のビスケツトを出してお盆を置いたと同時に、一つつまんで前歯に啜へられた。このビスケツトは石のやうに固かつたので、伊澤さんはそれを啜へたままでじつとしてゐられたが、口の中でもぐもぐ融かしはじめた。間もなく前歯でかりかりと嚙られたが、小氣味好いくらゐる遠慮をしなかつた。市長も總監もやつた、仕事には自信はある人だが、大匠は一度もやらない伊澤さんは僕の庭を最負にしてゐて、三年前に車で近くまで來

られ、道を間違へて歸られた。自分の知らうとすることでは、どういふはたけの違つた人にも會つて聞くといふ人だつた。雨がふり出したが、雨に關係なく落ちつてゐられた。外に二人座談會の人もあとを追つて來たが、こんどは、その二人と話し出した。氣取るとか構へなぞもないが、自分の言ひ出したことでは後へ引かぬ側の人だつた。正宗さんと對手が引かぬと見ると、問題を打つちやつて了つて對手にならなかつた。そんなことはどうでも關はないといふ打つちやりが、正宗さんなどには、隨時に話の間に見られた。肯定してゐるのか否定してゐるのか、うはべでは、分らなかつた。

雨が残つてゐたので息子を近くのお宅まで送らせ、歸つて來た息子の話では、まるで叱られてゐるみたいだと、短かいぶつきら棒の伊澤さんの言葉を批評していつた。近道を取つて南瓜畑に出て、柔らかい土の上で轉ばれたさうであるが、八十の高齡では、足なみがもろく轉びやすかつた。輕井澤は名士もたくさんゐるが、つきあつたのは故人になつた小野塚さんと伊澤さんくらゐであつた。

僕の文章はまはりくどい表現をするが、自分でも出来るだけすつきりしたい気が持
があつて、その事に従ふが、くせといふのか、性質なのか、何時の間にか廻りみち
をして、また元のところに戻るやうな文章を書いてゐた。そしてそれを直せば直す
程解らなくなり、自分でも困り切つてゐた。全然、書き直さなにかぎり文章の灰汁
は凝固するばかりであつた。だから、それを直して何行かを崩してしまふと、石垣
の石を抜いたやうにばらばらになつて了ひ、私は一たん書いたものは書きなほさな
いことにし、最初の文章を失はないやうにしてゐた。雑誌に發表されたものなど
に、かなり廻りくどい小説があつて、分らないやうな意味の文章が見られるのも、
さういふ譯であつた。改めるといふことは出来ないが、なるべく、すつきりしたも
のが書きたかつた。さういふ意味では、私の小説といふものも、はなはだ面白くな
い。讀むにたえないものかも知れない、僅かな情景とか心理とかをたよつて書くう
ちに、しだいに自分らしいつやを見付けて、それを磨き上げるやうな私の仕事は、
どこまでも私の流儀による小説であつて、小説らしい面白味などを缺いたものかも

知れなかつた。自然とか動植物に變つたうごきを見ると、そればかりを掘り返して
其處から去らうとしない私には、そんなことに興味をもたない讀者には、離いて來
られないのは當り前だつた。そしてその特質のやうなものを見付けてくれる讀者に
は、くせや動きまでが私らしいといふので認めてくれてゐた。ひと頻り私は原稿を
一度家にゐた友人に見て貰ひ、誤字や假名づかひや例の廻りくどいものを注意して
くれ、私はそれを訂正してゐた。その友人がゐなくなると、また、文章はそのまま世
間に出て、野性そのまま文學の山野を馳けまはるやうになつてゐた。心ある編輯者は
作家の前で原稿は決して讀まないしちくり廻すやうなことはないが、以前、原稿
をお金にかへるために持參して、雑誌社を訪ねたりした折、熱心に原稿の誤字を指
適してくれる人もあつたが、眼前にただの一枚でも讀まれることが、私はきらひで
あつた。編輯者といふものは作家の祕密をその原稿だけの分を、知つてゐる機會の
ある人であるから、徳義として讀まないでくれた方がよかつた。何故かといへば編
輯者は作家のペン書きの文字の配り方、削除の方法、組み立などに誰よりも先に、

誰よりもくはしく、直接に見てゐる人であるからだつた。或ひは遠眼の編輯者といふものは作家がどの程度の苦心を拂つて書いた原稿であるかといふことを、原稿をうづめる文字の沈著さでこまかく見る人でもあつた。だから彼こそは一つの作品に對する最初の批評家であり、いつも作家の間で徳を重んじなければならぬ人であつた。彼の意氣込みが作家をよく書かせるといふことも、ありうることなのだ。

或る夕方近い頃に例によつて東京かららしい、二人づれの客があつたが、それは綜合雑誌の記者の人で私もたのまれて書いてゐた。

けふお訪ねしたのはべつに用事がある譯ではなく、つい近くまで来たから寄つたといふ意味のことを述べてから、實は先日頂いた原稿のことで鳥渡お話したいのだが氣にかけないでゐてくれといつた。私はその社に渡した原稿の梗概と出來上りとを、すぐ頭で感じて、あの作品については此方がまごつくやうなことはないといふ、自信をもつてゐた。記者の一人は相當年をとつた人だつたが、卒直にいつてこんどの小説はどうも読んで面白くない。どこかに面白いところがあるといひんですが、

何とか一工夫して直してなり或る部分を書きなほしていただけないでせうか、そして頂けば大變たすかるのですが、あのままでは厭氣がして讀者もついて來ないのぢやないかと、その人は無遠慮につきこんで話した。私はそれらをゆつくり聞いてゐても、心にみだれが感じられずに、すつとしたいい氣分で、その作品が私のものとしていい方にぞくするもので、内々、私はそれが印刷になつて見ることを楽しんで待つてゐた。だから、遣つ付けたやうな仕事の虚を衝かれた感じがしなくて、白刃に眼を近くよせたやうな冷かな氣持になつてゐた。

私は書き直すとか、小説を面白くするとかいふことは絶対に出來ない、元來、私は面白い小説をかける側の作家でないことは、あなただつて知つてたのまれたのであらう、肝腎なことは一體あの小説の何處が面白くないのですかといふと、小説全體が面白くないといふのであつた。全體が面白くないといふことになれば、もうそれを話しあふのもむだなことで、私にとつては救ひ難い急所であるから引きさがるより外はなかつた。五人讀んで五人とも面白くない小説であれば、それはやはり結

局面白くも可笑しくもない小説であるのであらう。作者が眞摯に書いてゐても、一向、取柄のない小説だとすれば、才能のない作者の不幸が重なるばかりであつて、作家の悲劇がそこにある。そんな、どこにも見どころのない作者は抹殺されてもいいわけであつた。そしてさういふ作家がいまもなほ小説家として、とほつてゐることは益々不思議であつた。私はいままで嘗て面白い小説を書かうと考へて仕事についたことは、ただの一度もなかつた。何時も誠實と眞摯よりほかに私の據りどころはない、すくなくとも厭らしいことを厭らしいと知つて書いたこともなく、部分的には充分にちからを容れて書かないと、小説は書けなかつた。だから彼は何時も拙くとも原稿だけは一杯に書いてゐるので、記者の人に結局あなたから卒直な「面白くない小説」といはれても、びくともしないといつた。

「ところが彼の小説はさきと後とが話が違ひますね、まるで關係のないことが書いてあります。」

「それは意識的に材料をちがへてあるんです。」

「さうですか。」

「さきの方では僕の日常生活を書いてあるが、突然裏山の別荘が焼けた火事があつたのでそれを書いたんです。何處からはじまつて何處に落ちつくとも實は小説を書いてゐる私にも分らないことがあるんです。」

「そんなことがありますかね。」

老記者はそれははじめて聞くといふふうであつたが、若い記者は肯づいて見せた。かれは何となく突き込んでいつた。

「あなたのいはれるのは小説に少々の色氣があつてほしいといふ事ではないんですか。」

「いやそれ程でもないんですが、お話をうかがつてゐると、私どもとは違つたお考へであることも、よく解つて來ました。」

「つまり僕の小説ははじめから面白くないところを選んで歩いてゐるやうなものだ、ところが別の小説家がゐてその人の小説はいつも興味津々の間を歩いてゐるか

ら讀むのに退屈をさせない、こんなときには世間は僕の方に拍手を送らない、送るところかあなたのやうにもつと面白い物を書くやうにいつて來るでせう、つまり僕の方にまよつて作をもとめたことが、そもそも面白くない事件の發端なんですよ。」

「よく解りました。全く無駄だとは考へたんですが、御説を承つていいことをしたと思ひました。」

「先刻色氣の問題をちよつと匂はせましたが、もう息子や娘達も大きくなつてゐるので、書かなくともいいのなら男女の問題などはさつぱりと書かない方が氣が樂であり山の中にあるては書くこともないんです。いい年をして何野何子がどうしたなんて書けないぢやないですか。」

彼はしかしいい年をして、男女間の問題では、息子や娘が大きくならうとも、まだ、さういふ小さいことにかかはつてゐては、小説家が小説は書けるものではない。寧ろ息子や娘がゐるやうとも、それに超越して大いに書くべきではないかとも思つた。氣の小さい、いちいちした氣持でゐては、小説ばかりではなく文章も書けるもので

はなかつた。

「なる程、皆さんが成人されてはお困りのこともおありでせう。」

彼は老記者が作家といふもののなかでも、面白い小説の書けない彼といふ人間をやや會得した時分に、彼は自ら回顧していつた。

「僕の小説を面白くないと眼の前でははれたことは、けふがはじめなんです。それから何とか興味のあるものに手を入れてくれといはれたことも、はじめです。三十五年も書き續けてゐますが、平常から聞かうとしてゐることも、人は滅多にいつてくれさうもないものです。」

老記者は去つた。

彼は文藝批評などに作品の批評をされてゐても平氣だつたが、けふの客の言分は全然當つてゐないと見ても、直接に面白くないと聞いたことは、何としても頭にのこつた。元來、小説といふものは面白いものであるべき筈のものだが、それが面白くないといふことは、何物かが彼の頭に不足してゐるためであらう。讀者がついて

來るといふ領域が作家になかつたら、作家たるゆえんのものがないにちがひない、
すくなくとも作家は讀者を引きこむちからを、充分に持たなければならぬとしたら、
一たい、私がかれらを惹くちからを何處に持つてゐるのか、先づそれから決めてか
からなかつたら迂濶に筆も執れないわけであつた。彼はあたりを見廻し、自分のど
こが面白いのかそれを見さだめなければならなかつた。

此間、娘が或る商店に出向いて買物をする時、お内儀さんが出て來て、あなたの
お父様の小説にうちのことを書いてあるが、あれは困りますといつた。娘は何も知
らないのでいい加減な空返事をしてゐると、突然お内儀さんは衝撃的に荒い聲音で
いつた。

「あんな事より外に書くことがないんですか。」

娘は益々困つて家にかへると、私にお内儀さんが怒つてゐたといつた。私はあんな事より外に書くことがないんですかといふ言葉が、實にびたつといまの私に當て

はまつた批評なので、うまい事をいつたものだと、批評は誰にでも出来るものだと
思つた。他人からいへば、自分のことを書かれると、全くあんなのは小説ではある
まい。小説といふものはもつと別なものであつて、もつと立派（すくなくとも最つ
と變つたもの）に考へてゐるらしかつた。ところが小説はみんなが生きてゐるかぎ
り持ち合してゐるもので、どこまで小説的であり、どこまで小説的でないといふ區
別がつかないものであつた。もつとも小説的でないことがらは實際に人間が生きて
ゐると同じものであるから、たとへ、事件や筋がなくとも小説であるにちがひなか
つた。

息子が或る女の人に出會ふと、町でつかまつてたうとう小説に書きましたね、私
はそのうちあなたのお父様を懲らしめるために、そのすちに訴へて名譽を取り戻し
たい考へであるから、さういつて下さい、と、言はれたさうであつた。そこで君は
何といつて置いたのだといふと、それもいいでせうと答へたといつた。私は自分の
小説にかいたことがらを頭にうかべ、冷靜になつて若し嘘をかいてゐたら困るが、

實際の心にあるものを書いてゐたから、少しも困らなかつた。以前、或る女中が家で紛失した指輪に關して、私に疑心を持たせたことがらを書いたとき、旦那様にお目にかかりたうございますといつて、家を去つてから半年目に彼女は私をたづねて、私を取つちめた。私は取つたとは書いてゐない、かも知れぬと書いたのだといひ、大いに陳謝したのであつた。疑つてゐることはまだ左うあり得ないことであるから、それを早々にかいたことはいけなかつた。だから私は快よくあやまつたのであつた。彼女も改心した私の實情をみとめて許してくれた。

町でまた或る人はいつた。おれのことを書いたら一番大切な庭をこはして遣るぞと、私は書かない前に警告されたのであつた。私は苦笑して實際になかつた事は斷じて書かないが、存在してゐた實際のことから私の良心をくぐり、私の頭に問題として取り上げられることでは、少しも容赦はしないと答へたのであつた。小説とか文章をかいてゐる間は、あつちこつちを見廻してゐてはいいものが書けない、事實はそのまま托げずにかいてゆくことで、何物にも恐れることはないのである。人

を誣ひたり損じたりしてはならぬ、人を褒め、人の善いことを書くことで何を恐れる必要があらう、そのため毆ぐられたり殺された詩人は世界に一人もゐなかつたのである。

「お父様もいい加減になすつたらどう、わたし達がこまるわ。」

娘の三子はさう彼に忠告した。

「うそを書かなければいいんだよ、書くことに恐れをもつことは見下げはてた女土さ。いまは文化人がやつと生きられ、やつと考へことを正直に書ける時をつかまへたのだ。正直と誠實の前に何も起つて來はしない。おれはたまつてゐることをどう書かうかと考へると、ちよつと夜も睡れないくらゐだ。」

彼は本當のことをいつた。

まだ一つも手をつけてゐない事件をかくために、そのつなぎに短篇ばかり書いてゐなければならぬ、期が熟するのを待つために、彼は彼の身のまはりを先づ整理するために一年間ばかり打つづけに、彼自身とそのまはりをかいてゐた。そして

馬

そこから、そろそろ引き上げねばならなかつた。うるさいまはりのかたはついたのだ。そして私の頭はからツぽになつてゐた。だから出直して少々暴れるのも、期を得てゐるしそれを待ちかまへてゐたのである。